

あべこべ道！ 乙女が
強き世界にて

マロンex

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大洗大学の入学式の朝、突然主人公は男女の価値観が逆転した世界に飛ばされてしまった。

女性主体な世界に困惑しつつも、少しずつ順応する主人公とそれに惹かれる強き乙女たちを描きます。

※基本主人公はヘタレです。

ガールズ&パンツァー×貞操逆転×ラブコメ

いろんな要素詰め込みまくり作品です。

※新話でキャラが登場した際にはタグを追加していくつもりです。

へ9 / 29 へ タグの文字数の関係でメインキャラのみとします。

感想、ご意見気軽にください。励みにします。

○○出して欲しい、○○はこう言う設定がいい等も嬉しいです。

参考にさせていただきます。

基本的にガルパンのキャラは全部okです。

※暁、pixivにて同時投稿中

目次

第1話	いつもと違う世界	2
第2話	新しい友達ができました	

11

第3話	オリエンテーション	18
第4話	学生自治会と風紀委員	26
第5話	学食とサークル	34
第6話	K様	45
第7話	飲み会	53
第8話	姉との再会	64
第9話	託された想い	70
第10話	幼馴染 (過去編)	76
第11話	別れ (過去編)	85

第12話	盤外戦術	95
第13話	英国淑女	102
第14話	練習試合	109
第15話	運命の人	119
第16話	相談 (前編)	127
第17話	相談 (後編)	135
第18話	島田家の救世主	147
第19話	男性恐怖症	154
第20話	味音痴のお嬢様	160
第20・5話	味音痴のお嬢様 裏	
169		
第21話	それがボコだから	180
第22話	ミスサンダースの頼み事	

第1話　いつもと違う世界

ピピピピッ　ピピピピッ　ピピピピッ

「ひろー！　いつまで寝てるのー。目覚ましうるさいから止めてー」

「うーん…　後5分だけ…」

ピピピピッ　ピピピピッ

ドンドンドンッ

「目覚ましうるさいって！　もう朝食できてるから早く食べて！　初日から遅刻しちゃうわよー！」

「はーい…　うわっ寒っ…」

掛け布団をひっぺがされ目が覚めた午前7時。

私河野ひろ、大学1年生になりました。今日はそんな大学生活の記念すべき1日目の入学式。

本来ならきつとワクワクとドキドキに身を包んだ緊張の1日だろう。

だが、残念なことに適当に選んだよくわからない辺鄙の地の大学に入学することになったこともあり、私自身は新生活に全くきらめきを感じていなかった。というかむしろ

ろ…

「はあ… 通学時間1時間越え、戦車部(学部名)での陸の孤島での夢の学園生活が始まるのかあ…」

朝からそんな愚痴をこぼしながら、寝癖ぼさぼさの状態で階段を降りる。

「ふいー。よっこいしょ。… いただきます」

「こら、男の子がそんな言葉言うんじゃないのまったく… 寝癖もついているし身だしなみくらいシャキツとしなさいよ」

「はあ? なにそれ… って龍弥どしたのそのかつこ」

少し違和感を覚える母の言葉を聞き流し、ふと弟の龍弥に視線が映る。同じく今年で高校1年になった弟は服装こそは制服だが、髪は昨日見たときよりやけにサラサラ、爪にはネイル?らしきものをつけており、極め付けに耳には小さなピアスをつけていた。

「なにつて… 最低限の身だしなみ程度だよ。お兄ちゃんこそ大学生にもなって初日からそんな格好で行くわけ? だから彼女の一人もできないんじゃないの?」

「かつ… 彼女とかは関係ないだろ! っていうかお前、随分おしゃれに…」

自分と同じく面倒臭がりの我が弟は、中学までは制服以外はジャージと同じTシャツ。寝癖もそこそこに毎日学校に通っていたはずだったが… ていうかいつの間にピアスなんて買ったんだ?

「お兄ちゃんが無頓着なだけでしょ、これくらい男子なら普通……いや少し地味目くらいだと思うけど?」

「地味って……うーん……今時はそんなもんなのか?」

「そうだよ……お兄ちゃんも、今日入学式なんですよ。いつまでもそんなんでいいないで、これを機に男子力でもあげたら?」

(男子力? なんだそれ、女子力の対義語か?……まあ青い春な高校生、背伸びしたい年頃なんだろうな。にしても……高校デビューでも狙ってんのか? やけにガラツと雰囲気変えてきたな……両親もなんも言わないし)

「ははっなんだそりゃ、俺には一生無縁の言葉だな。じゃあチャチャッと準備して行つてきますかねー」

「……お兄ちゃん、まさかとは思うけど寝癖直して服きて終わり……みたいなことはないよね?」

「は? それ以上になんかすることある? ああ、歯磨きもするが……」

「……もう! ちよつとこつちきて!」

「ちよ! なにすんだよ!」

突然、腕を引つ張られ、洗面所に連れて行かれる。慣れた手つきで髪をセットしたり、化粧水を塗られたり、爪を磨かれたりすること20分、ようやく満足したのか、弟が手

を止めた。

「… まあ、これなら許容範囲かなあ」

「おい、なんだよこれ、別にここまでしなくても…」

（おいおい、なんだこれ、これって俺なのか？ すごいなんというか… まともに見える！）

「あのさ、お兄ちゃん。弟としてより、男として言わせてもらおうけど、さつきまでの格好、正直終わってるよ。冗談抜きで男捨ててるとしか思えないんだけど。家族として恥ずかしいから明日からは最低限これくらいは善処してよね」

「善処って…」

「あ、あと、服も今日だけは自分のチョイスで選ばせてもらったからこれきてね。あの様子だとパーカーにズボンとかで出て行きそうだから」

「はあ？ 何でお前に服まで！」

「きてね、わかった？」

「あ、は、はい…」

反論しようと思ったが、弟の目がマジだったのでやめた。これは逆らったら殺されるやっだ。

「じゃあ、僕は行ってくるから、お兄ちゃんも頑張つてねー」

「行つてらっしやーい。：：。 あら、ひろも随分男らしくなつたじゃない、ふふつ、華の男子大生つて感じよ」

「：：華？ だめだ。：：俺がおかしいのか？ 昨日まではこんな。：：」

母の言葉や弟の言動に少し違和感を覚えつつも、慣れない格好のままリビングに戻りテレビをつける。

明らかに昨日とは違う世界に戸惑いを隠せない。

〈続いてのニュースです。昨今問題になっている男性へのセクハラ行為に対して、政府は具体的な。：：〉

〈今話題！ 男子必見のおしゃれカフェ特集！。：：〉

〈絶対に焼かない、男を磨くのは40を過ぎてから。：：〉

「やっぱりおかし。：：これってまさか男女が。：：」

「なにブツクサ言つてんのよ、ほら、さっさとしないと本当に遅刻するわよ」

「やべっ！ こんな時間か！ 行つてきまーす!!」

「はーい、行つてらっしやーい」

朝から戸惑っているうちに、遅刻ギリギリの時間になつていた。息急ぎ切つてホームに向かう。何とか電車の時間には間に合ったようだ。電車に乗り込み、今日の朝からの違和感を整理していた。

(母親の言葉、弟の自分に対する言動……うーん……男女間で何かが逆転して……)

考えをまとめている最中、お尻に妙な違和感を感じた。

(嘘……これって……)

気配から察するに後ろに誰かおり、明らかに意図的に触られている。

(マジかよ……これって痴漢てやつ……!?)

当然初めての経験だったので、硬直して動けず、声を出そうにも恐怖からか震えてうまく発することができない。しかも小柄な体格と混んだ車内のせいで、周りは全く気づいていないようだった

「あ、あの……やめて……」

情けない声を必死に振り絞り、声を出したが、触れている手は逆により強くなっている気がした。

(まじか……何でだ……めちゃくちや怖い……大学まではまだまだ時間あるし……どーしよ……)

情けなく涙目になり、途方に暮れていると、後ろから大きな声があった。

「おい、その女、なにやってる」

「な、なにもして……」

「嘘だな、お前、この男の子に痴女してただろ。ホームに降りろ」

(痴女するつてすごいワードだな… てかかっこいいこの人…)

「ちよ、ちよつと!」

「いいから降りろ」

凜とした目で『黒森峰』と書かれたバックを持った女性が自分のお尻に触れていた手を力強く引き剥がした。

タイミングよく駅に着き、無理やり痴女を引き摺り下ろすと、手際よく車掌に身柄を引き渡していた。

「あ… あの… ありがとうございました」

その女性についていき、自分もホームに降りた。どうしてもお礼を言いたい一心だった。

「むっ… ついてきたのか… いや何、当然のことをしたまでだ気にするな。それより、最近はあるという輩が増えているからな。気をつけろよ」

(うわあ… かっこいいなあ。 男の俺より全然男らしい…)

「… 電車、途中で降りてしまって大丈夫だったのか? 随分急いでいたみたいだったが…」

「え? 電車… あー!!! しまった! あれってそういえば大洗への最後の電車だった… 遅刻確定だ…」

「大洗．．？　もしかして大洗大学へ行くつもりだったのか？」

「え？　ええ．．よくご存知で」

「ああ、妹が通つていてな。今日は入学式というから観に行こうと思つていたところだ、奇遇だな．．．　ちようどいい、一緒に行くか。場所も駅から若干離れているしな、案内ついでにもなるだろう」

（かつこいい上に気配り上手．．　自分が女だったら間違いなく今ので惚れてる）

「はい！　是非！　で、でもこのままだと遅刻ですね．．　どうしましょう」

「なに、電車がないだけで時間はたつぷりあるんだ、他の交通手段を使えばいい。タクシーならそこらへんで捕まるだろう」

「そうですね、そうしましょうか．．」

（こつから大洗までタクシーつてまじか、そんなに金あつたけ．．）

「うむ、決まりだな。では行こうか」

運よくすぐに捕まったタクシーに乗りこむと、自分とその女性は大洗大学に向かう。寡黙な性格なのだろう、車内に乗つてから外を眺め、一言も話さない彼女だったが不思議と気まずくはなく、むしろ安心感を覚えた。

（今日はなんだか．．　もう始まったばかりなのに．．　つかれたな．．）

明らかに昨日とは違う世界に戸惑いっぱなしだった自分につかの間の平穩が訪れ、気

がつくと眠りについていたのだった。

第2話 新しい友達ができました

「おい、君。。。着いたぞ、起きろ」

「う、うーん？ はっ。。。しまったすつかり熟睡してた。。。ははっすみません。。。」

「。。。タクシーを提案した私がいるのもなんだが、君は少し警戒心というものをもて。。。私がああ痴女のような輩だったら間違いないと襲われてるぞ」

「警戒心。。。ですか。そうですね、たしかにあの時はすごい怖かったし。。。武術でも学ぼうかなー」

「いやいや。。。そういうことではなくて。。。まあいい、着いたし行くぞ、あまり時間が無い」

「そうですね。。。あつ、タクシー代半分払いますよ、いくらですか？」

「いいよ。。。これくらい、私が出そう」

「え。。。でも助けてもらった上にタクシー代まで。。。悪いですよ」

「だからいいって。。。こういう時は女の面子を立てさせてくれ。私も好きでやっているだけだしな」

「は、はあ。。。」

(.: : もう男とか女とか関係なく普通に憧れるかつこよさだなこの人.: :)

結局、押し切られタクシー代も出してもらった後、用事があるというのでその女性とは大学の正門でお別れした。

別れ際に困ったときはいつでも言えと電話番号の入った紙を渡されたがそのメモには大きく『西住流』と書かれていた。

「なんだったんだろう、あの女の人.: : このメモの西住流って.: : もしかしてそつち系の人だったりして.: :」

そんな独り言を呟きながら入学式の会場に向かっていると、またもや妙な違和感を覚えた。大学に入るやいなや周りの人物は女一色。右も左も女の人しか目につかない。

(うーん、なんか女ばっかだな.: :。そういえば入試の時も女が多かったような.: :。少し窮屈だな.: :)

女性ばかりというのもあるが、妙に視線を感じて居心地が悪い。

式が始まってでもその違和感は続き、なぜか自分のことを見て騒いだり、やたらコソコソと話し声が聞こえて全然集中できなかった。

『あれが噂の.: :。?』『絶対そうでしょ!』

『マジか! あの子がそうなんだ! きたー! 私これ終わったら声かけちやおつかない!』

「なんだ？ 日程間違えたか？ それとも場所か？ さつきから男マジで俺だけじゃ…」

「えーみなさん！ ご入学おめでとうございます！ 昨年までは女子大だった我が校も今年から共学となります！ …… 残念ながら男子生徒は1名と現状ほぼ変わらないですが… 今後はドンドンと多くの生徒を迎え、戦車道の多様化とジエンダーレスを…」

「…… は？」

入学式で校長が言った言葉に耳を疑った。そんなバカなと入り口でもらった『大洗大学』のパンフレットを見ると

女子生徒：3800人

男子生徒：1人

（ほんとだ… 沿革に昨年までは『大洗女子大学だった』って… 嘘だろ… 確かにそうなる… さつきまでの違和感も…）

「これから4年間… この生活…」

もうそのあとの校長の言葉なんて耳に入らなかった。入学式が終わったころには周りの視線なんて気にもならないほど、困惑を隠せなかった。

「おそらく朝の違和感からしてこの世界は男女が… しかもそれに追い打ちして同性の

仲間がいけないとなると相談する人も……」

「ねえ、君」

「いや待て、まだ朝助けてくれた人がいるじゃないか、あの人ならこの違和感の相談にも……」

「ねえってば!」

「え? は、はい! なんででしょう!」

「……あ、ごめん。驚かすつもりじゃなかったんだけど……君が噂の我が校のファースト男子?」

「え、あ、はい……噂とかはよくわかりませんが……そうみたいです。何か用ですか?」
「やーん、やつぱり! 想像してたよりも何十倍も可愛いねえ! 君名前なんていうの? 彼女いる?」

「やめろ沙織、今のお前、完全に道端でナンパしてるチャラ女だぞ」

「なによー。女がガツガツ行かないでどうすんのよ! 草食系女子なんてクソ食らえよ」

「はあ……なんでこうもこいつは……」

終わって出て行くと早々に女子生徒に声をかけられた。赤縁のメガネをかけた元気そうな茶髪の子と、その袖を引っ張る黒髪の低血圧そうな子。まあでも悪い人たち

じやなさそうだ。

「え、えつと名前は河野ひろつて言います…。彼女はその…。今までできたことなくて…。」

「おい…。君も沙織の冗談まともに受けなくていいから…。」

「嘘ー！ こんなに可愛いのに!? 周りの女の目腐つてるんじゃないの!? 君も少しアプローチすればいけそうなきが…。」

「うーん…。部活に打ち込んでてそんなこと考えたこともないですね…。」

（あれ？ 自分で言つて悲しくなつてきたぞ？ 完全に言い訳やん）

「へー…。部活にねえ…。どうりで」

胸元や腰をチラツツと見られる。まあ本当に打ち込んでたから多少は引き締まつてはいるだろうが、見られて気分がいいものではないな。

「…。沙織。お前ほんと…。」

「いや！ 違つ…。これは女の性つてやつで…。」

ゴミを見るような目で見つめる黒髪の女の子。何だが若干気まずいので自分から話し始める。

「実は高校までは男子校だったんですよね…。恥ずかしながらこんな女性に囲まれる体験自体初めてで…。」

「えっ！それっていわゆる箱入り息子ってやつじゃん！！　うわあ！私が最初の王女様になりましょうか？…　なんてねえ…　えへへ」

「ほんときもいなお前、男の子引いてるぞ」

「うそうそ！ごめん！！　引かないで！！　あ、てかラインやってる？」

「ははっ…　あつラインなら…　「まあ沙織の冗談は置いといて、私たちも自己紹介だ。このうるさいのが武部沙織。私が冷泉麻子だ。まあなんとでもよんでくれ」

「あっはい…　武部さんに…　冷泉さんですね…　よろしくです」

（あ、今の冗談なんだ…）

「うむ、で君、なに学部？」

「えっと…　戦車部です」

「！！　やったー！　同じ学部じゃん！　やつぱり運命ってあるんだねえ！」

「沙織うるさいから黙ってる…　まあ同じ学部なら話は早いな、これからオリエンテーションあるからよかつたら一緒に行くか？」

「えっ！　はい！　是非！よかつたあ…　正直不安だったんですね。こえかけてくれるひといてよかつたです」

ドキッ「えっ…　いやまあこれくらい…　気にするな」

「あれえ？ 麻子顔赤くない？ 照れてんの？」

「… 黙れ。おまえ置いてこの子と行くぞ？」

「やーん、独占欲つてヤツウ？ 私お邪魔でしたかー？」

「これ以上言うなら殴るぞ」 バキッ

「… 痛ったあ！ちよっ！そのセリフは殴らないときに使うやつでしょー！もー！」

「いいからいくぞ…。えつと… 河野さん… これからよろしく頼むな」

「はい！ 武部さん！ 冷泉さん！ よろしくお願います！」

「いつも一緒にいる子がもう1人いるからその子も後で紹介するねー！ じゃあいこ！

河野ちゃん！」

「か… かわのちゃん…？」

（よかった… とりあえずは安心だ…）

不安と絶望に満ちていた大学生生活に一筋の光が射したような気がした。

第3話 オリエンテーション

2人に連れられた部のオリエンテーションの会場には、同じ戦車部の生徒たちがぎつしりと詰まっている……。まあ全員女のわけだが。

戦車部での学びや4年間の過ごし方をレクチャーしてくれるらしい。

(とにかく今は情報が欲しい……。元の世界との違いを知るんだ。)

「静まれ！ 立っているものは席につけ！ これより、蝶野亜美教官より、説明を行う！」

スツと入ってきた複数の女性。中心に立つひとときわ凛々しい女性が第一声をあげると同時にざわついた教室が一瞬で静まり返った。

「ねえ……。あの真ん中の人って有名なんですか？」

「知らないの？ うちの大学の特別教官だよ。戦車道界限で知らない人はいないレベルの有名人なんだよね……。いいなあ、モテるんだろうなあ」

「教官目当てでうちの大学受けるやつも多いくらいだからな……。まあかなりのスパルタらしいから私は授業受けるのごめんだがな」

「へー……」

(全然知らなかった…。うちの大学ってもしかして結構すごいところなのか？)

「紹介に預かった蝶野だ！ 生徒諸君、大洗大学入学おめでとう！まずは第一関門突破といったところだな。この4年間を通して強くたくましい日本女子になれるよう、精進してくれ！ 我々教官も君たちの頑張りを全力で応援する！…。では早速だがまずは戦車道について。」

オリエンテーションの中でこの世界についてもすこしわかったことがある。

1つ、やはりこの世界は女性主体、男性は守られる存在という元の世界とは真逆の価値観であること。

2つ、戦車道関連の仕事が女性にとって安定した人気の職業(公務員のようなもの)であること。

そして一番驚いたのは、元の世界よりもジェンダーフリーがはるかに進んでいないことだ。

戦車道でもそれは顕著に現れており、つい最近までは男性の参加はおろか、関わることすらタブーにされていたようだ。

(なるほど…。共学になったのに男子が俺だけなのも世の風潮を表してたってわけか…。うーんだとしたらおれは世間からはどう見られて…。)

カリカリカリッ…

「ねえ、麻子、河野ちゃん随分熱心にメモ取ってるね、さつきから一言も話さないや」
「無理もない…。女性でさえ仕事として持てるのは一握りの職業だ。そこに男が行くとなると並大抵の努力じゃたりで足りないだろうから…。必死にもなる…。お前も少しは見習っ…。」

「…。真剣にメモ取ってる姿…。なんかいいっ！…。庇護欲をそそられるっていうか…。いいねっ！」

「…。真面目に話した私がバカだった」

横で壮大な勘違いをされつつ、そんなことには目もくれず一心不乱にメモを取り続け、気がつくとオリエンテーションは終わっていた。

「では各自、今日はこれで終了だ。各々好きな時間を過ごすといい、では4年間共に頑張ろう！では、解散！」

—————

「…。うーん！おわったあ！長かったねえ！」

「お前後半寝てただけだろ。少しは河野を見習え」

「いや…。それは俺が単純に無知なだけで…。」

「何よー。麻子だつて寝てたくせにー！」

「私はお前と違って無駄な話を仮眠に当てただけだ」

「おんなじでしょ!？」

「アホな沙織は置いといて、河野さん、この後ご飯でも行かない? あ、河野さんさえよければだけど……」

「あー! まこ! 抜け駆けしないでよ! 私も……」ガラガラツ!

「河野はいるか! 戦車部と聞いているが!」

「いたいた! 部長! あの子です!」

「よし! 先手必勝! 大洗の青き春は我々がいただく!」

教室の外に出ようと扉を開けた瞬間、大量の生徒が雪崩れ込み、一瞬で自分の周りを取り囲み、一斉に話し始める。

「ラグビー部部長の春野だ! 河野ひろさんで間違いないな!」

「えっ? あ、はいそうですけど……」

「君! 我が部に興味ないかい? 是非マネージャーとして入って欲しい! 共に青春の汗を流さないかい?」

「いやいや! 可憐な花にこんなむさい部活似合わない! ここは我ら天文学部と一緒にロマンチックに星空を眺めないかい?」

「君やっぱ可愛いねえ……写真部に興味ない?……今なら一眼レフ無料で貸し出すよお。えへへ……一眼男子……いいねえ」

「え……えつと……」

(よくわからないけど……なんか無下にもしづらい雰囲気……)

ギラギラとした視線と熱気がが周りを取り囲む。その数30……いや40人はいるだろうか。文化部運動部関係なく、いるところを見ると珍しい男性生徒を勧誘したいのだろうか。

「あー、あはは……。どーしようか二人とも……つてあれ!?いない!?!」

あまりの数の生徒に抜け出せそうな雰囲気もない上、頼みの綱だった2人のはいつの間にかはぐれてしまった。

(さっき大量になだれ込んだ時にはぐれたのか……。くっ……。断ろうにもしつこそうだし、逃げようにも退路もねえし……。くううどーすれば)

「ねえ、頼むよー! 演劇みにくるだけでもいいからさあ……」 「ちよ! あなた! 今は私たちが勧誘を……」

「レッツ! スイミング! 水着の君がみたい!」

だんだんと勧誘全体の熱が上がっていき、じりじりと詰め寄ってくるが、全く打開策を見出せない。

(だめだ……。もう終わりだ……)

「あーいきました! いきました! よかったー! あなたも華道部の参加希望者ですよね!

もー探しましたよー」

絶体絶命かと思われた刹那、突然現れた長髪のスタイルの良い女性に腕を引つ張られる。

「え……俺……参加希望なんて……というかあなた誰……？」

「……ここは任せてください」ニコツ

「え、あ……はい」

「はい！ どいてくださいーい！ 先約があるので失礼しますねー！」

困惑しながらもとりあえず逃げ出したい一心だった俺は彼女についていくことにした。力強く人だかりを掻き分け颯爽とその場を離れていく。

「ちよつとー！ 何よあんだ……今は私たちが……」

「こらー！ あんたたちー！ 時間外の勧誘は禁止つて言つたでしょー！」

「げっ！ 風紀委員がきたー！」「逃げろ逃げろー！」「くっそー！ あ、君ー！ 興味あつたら顔出すだけでもきてねー！」

風紀委員から逃げ出す勧誘生徒を尻目に、力強くその女性に手を引かれた俺は何とか窮地を脱することができた。逃げるのに夢中で気がつかなかったが、連れられたのはよくみるとボロボロの部屋だった。

「……ふう。とりあえずここまでくれば大丈夫でしょう……。怪我はないですか？」

「あ、はい…… 特にはないですけど…… あなたは……？」

「…… 申し遅れました。私五十鈴華と言います。さつき言った通り華道部に所属する予定です…… ごめんなさい、突然こんなことしちゃつて。何だかほつとけなくて」

「いえ！ むしろ助かりました！ 正直結構怖くて……」

「いいんですよ、気にしないでください。困っている男性を助けるのは乙女の嗜みですから」

「ほんと、ありがとうございます。五十鈴さんみたいな人がいなかったらいまごろどうなっていたことか……」

「私みたいな人…… ですか…… ふふっ」 ガチャ

「えっ……？ えつと、五十鈴さん？ 何で部室の鍵を閉めて……」

突然扉の鍵を閉めたのに焦り五十鈴さんに近づくと、腕を強く掴まれ、壁に追いやられた。

「…… ここは旧校舎の廃部した部の部室でしてね、滅多に人も訪れないですよ。ここに私とあなた2人きり…… どういう意味かわかりますよね？」

「じよ…… 冗談きついなあ、五十鈴さんがそんなことするわけ……」

（これは…… いわゆる逆壁ドン!? いやこの世界だと通常の壁ドンなのか…… いやそうじゃなくて！）

「噂には聞いてましたが… あなた本当に警戒心がないんですね…。 まあこちらとしては好都合でしたが…」

必死に抵抗しようともがくか、相当力が強いのかビクともしない。嬉しそうにじっと見つめていた五十鈴さんの顔が近づき、吐息が顔にかかる。

(どどどどどーしよ！ なんだこれ!?)

河野ひろはこの世界に来て早くも3度目の危機に直面するのであった。

第4話 学生自治会と風紀委員

(落ち着け・考えろ・・・あーでも身動き取れないし・・・)

「くっ・・・ やめてください！ このっ！ 離せっ！」

体を必死にくねらせもがいて抜け出そうとするが、力の差が歴然すぎて全く効果がな
い

「・・・ そんな抵抗無駄ですよ？ 男女でどれだけ力の差があるとお思いですか？ 体力を消耗するだけですよ」

「くっ・・・」

(五十鈴さんの言う通り・・・ 力任せに押ししても無意味だ・・・ もっと別の方法を・・・) バ
キッ

「あらあら、床が抜けてしまいましたわ。無理もないですね。この部屋、長らく使われて
いないせいで相当老朽化も進んでいますから・・・」

(老朽化・・・ 脆い・・・ もしかしたら・・・)

「・・・ さて、万策つきましたか？ ではこちらの番・・・」

「・・・ それはどうか！ 喰らえ！ 床踏み抜きキータック！」

「片足に思い切り体重をかけ床を踏み抜く。カクンと体制が崩れたおかげで掴んでいた腕が離れたその瞬間を狙い、もう片方の足で五十鈴さんの脇腹に向かって全力で蹴りを加える。

「うおお！ くらええええ!!」

「…なるほど… 状況に応じた機転は効くようですね。ですが…」ガシツ

渾身の左キックはいとも簡単に片手で見切られ、逆に掴まれてしまった。

「この場合はにげることには重きをおくべきです。こうなったらどうするつもりだったのですか？」

（あ… おわた… 右足固定されてて逃げられんし…）

ぎゅつと目をつぶり死を覚悟したが、しばらくして少しため息をついた五十鈴さんは、掴んでいた自分の足をそつと下ろした。

「：まあ及第点といったところですかね。肝心の判断力が少しズレてはいますが… あ、もう入ってきていいですよ、皆様方」ガチャ

「すごいね、華さん。演技とは思えなかったよ」

「ほんとよ！ 正直本気なんじゃないかってハラハラしたわよ！」

「あー、声だけじゃなくて状況も見たかったなあ」

「へ？… えつと… え？」

声とともにおかつぱの3人組の女の子が部屋に入ってくる。よく見ると先ほど後ろで叫んでいた風紀委員のメンツだった。

「…改めて自己紹介します。わたくし、大洗大学 学生自治会の五十鈴華と申します。今回風紀委員にご協力していただき、あなたのテストをさせていただきました」

「て、テスト？」

「…はあ。この状況でもまだわからないのですか…。襲われた時どうするのかのテストですよ！ 全く…。獣の群れに自ら志願したと聞いてどんなに肝の座った子だと思えば…。男って自覚あるんですか？ だいたい…。」

「まあまあ！ そんなツンツンしなさんな。まったく、素直じゃないんだから。めちゃくちゃ心配してた癖に」

「なっ…。し、してません！ ただこの子があまりに無警戒だから…。心配とかじゃ…。」

さつきまでの威勢が一気になくなり、困惑する五十鈴さん。それに追い打ちをかけるように他の2人も話し始める。

「そうよ！ 1人じゃ危ないからとか言って入学式から見張らされてた私たちの身にもなりなさいよ！ 職権乱用よ！」

「さつきだって作戦無視して突撃しちゃうしねー、あんなに真剣な顔久々に見たよー」

「いやっ…… だから違います…… そんなんじや…… ただ生徒会として職務を……」
なるほど、すぐに後ろから風紀委員が駆けつけたのもこれで合点が行く。

（獣の群れか……。 たしかに逆転した世界ではこの人の言う通りだ……。 だとしたら自分の身は自分で守れるようにならないと……。 いつまでも甘えてちゃダメだよな……）

「あ、あの……。 もしよかつたらこれからも……。 その……。 ご指導お願いしてもいいですか？」

「ど、どうしてあなたのためのそんな……。」

「お願いします！ 俺、五十鈴さんのようにかっこよくなりたいです！」

「っ！……。 し、仕方ありませんね！ わたくしとしてもあなたのような危険因子を野放しにはできませんしね。 協力して差し上げましょう！」

「やった！ ありがとうございます！」

「うわあ、めっちゃ嬉しそー、てかちよろすぎる」

「女のツンデレなんて需要ないわよまったく」

「声うわずってない？ 案外ウブなんだねー」 ヒソヒソ

「…… その3人、全部聞こえてますけど？」

「…… あっやばい……。 目がマジだ……。」

「…… さて、では用も済みましたし移動しましょうか」

「そうですね、そろそろお昼のじかんですし…。あ、そうだ、これから友人と食堂に行く予定なんですが…。みなさん一緒にどうですか？」

「あー、申し訳ないけど風紀委員はこの後会議があるから遠慮するわ」

「わたくしは是非、行かせていただきますわ…。それで、そのお友達というのはどこに…」

「あー！ いたいた！ もーどこいったのよー」

「…よかった、とりあえず無事のようだな」

部室を出て、すぐに武部さんと冷泉さんが駆けつけてきてくれた。どうやら大学中を探し回ってくれていたらしい。悪いことをしてしまった。

「ごめんなさい、ご心配おかけしました」

「大丈夫？ 怪我はない？」

「はい。この方々が助けてくれたので…」

「この方々…って華!? それに風紀委員3人組も！ なんで!？」

「まあ、かくかくしかじかありまして…」

「あーなるほどねー!」

「ちっ…なんでお前がここに…」

「あー、これはこれは…れまこさん、奇遇ねえ」

「… おまえ。河野さんに変なことしてないだろうな」

「ふん、するわけないでしょ。清く正しい風紀のため、か弱き男子を助けたまでよ…
ねー河野さん」

「あ、はい…。その節はお世話になりました…」

（なんだ、このおかつぱの子急に積極的になつたな…。冷泉さんめっちゃ睨んでくるし…）

「そどこ…。お前、どうやら本気でぶつ飛ばされたいようだな…」

「上等よ！ かかつてきなさいよ！アホれまこ！」

まさに蛇とマングース。一触即発の雰囲気は二人の間に流れていた。ただならぬ空気の中心、沙織さんに耳打ちする。

「… あ、あの武部さん、あのお二人って仲が悪いんですか？」

「あー、気にしないで。いつもあんな感じだから」

「まあ、風物詩…。いえ、痴話喧嘩といったところでしょうか。わたくし含めここにいる全員が同じ高校だったので見慣れた光景ですね」

「あ、皆さん同じ高校だったんですね！ それは知りませんでした」

「まあ、喧嘩するほど仲がいいってやつだね」

「仲良くない！」

「あはは… ほんとだ。息びったりですわね…」

「… あーそうですわ沙織さん、この後お昼にいくんですわね。私もご一緒してもよろしいですか？」

「オツケー、全然いいよー！ この食堂めっちゃ美味しいらしいよー！」

「あら、それは楽しみですわね…。 お恥ずかしながら朝からずっと動きっぱなしで、もうお腹ペコペコでして…」

今にも殴りかからんとする勢いで言い合いをする二人を気にも留めず、話し始める二人。 どうやら本当にいつも通りの風景らしい。

「じゃあ河野ちゃん、食堂行こっか。 お腹すいたでしょー！」

「はい、いきましよう」

「… ほーら！麻子も！行くよー、いつまでやってんの!!」ガシツ

「離せ沙織！ 一回こいつにはガツンと…。 お前！ 二度と河野さんに近づくなよ！」

「ソド子もほら、その辺にしていくなよー。 会議遅れちゃうよ」ガシツ

「何すんのおゴモヨ！ ここは風紀員としてあのバカにお灸を据えてやるのよ！」

「うふふ…。 さて…。 何をたべましようか…。 楽しみです…」

「もー！ 麻子！ 暴れないでよー!!」

「あははー…。 皆さんお元気ですわね…」

(なんかこの大学：：みんな個性的だな：：別の意味で不安になってきた：：)

言い合いの最中、首根っこを捕まれながら、武部さんとゴモヨさん(?)にズルズルと引つ張られ、強制的に連れていかれる二人。その横でお昼のことで頭がいつぱいの五十鈴さんを眺めながら、ただただ苦笑いをするしかない河野であった。

第5話 学食とサークル

「いやあ、ここの海鮮丼美味しかったねー。これで500円はコスパいいわ!」

「大洗名物のおんこう定食、それにこのアンコウ鍋焼きうどんも美味でしたよ」

「デザートも豊富だな。今年から大量にメニューを増やしたらしいが、大学側も露骨に男子受けを狙ってるようだな…」モグモグ

「もー、麻子、食べながら話さないの! 御行儀悪いよ!」

「たしかに、こちらの干し芋アイスも美味ですねえ…」

「え、ええ…」

(1人で定食4つ食べる人初めて見た…)

五十鈴さんを加えた4人で大学の食堂に來た。噂通り近くの海鮮物をふんだんに使った料理はかなりレベルが高く箸が進んだ。だがそれ以上に五十鈴さんの食べっぷりに圧倒されてそれどころではなかった。現在は締めデザート中。

「ん? どうしました? 私をじつと見て…紫芋アイスはお口にありませんでしたか?」

「い! いえ! とても美味しいですよ! あははっ…おいしーな!」

『五十鈴さんよく食べますね』なんて言ったら殺されるのかな

「：： 気にするな、お前が言わんとしてることがわかる。あいつの食欲を見て驚くなどという方が無理がある」

「これでも普段の半分くらいに抑えてるもんねー。全く、その細い体のどこに入ってるんだか」

「えっ!? 半分：：？ 冗談ですよね？」

「もー、沙織さんそれはないですよ」

「で、ですよね！」

「普段の1/3くらいです。この後学生自治会のお食事があるので」

(フードファイターかな?)

—————

「ふー、食べた食べた。：： さて、みんなこの後どうするの？ 私はサークルの見学行くつもりなんだけど。： 華は自治会行くんだっけ」

「そうですね。名残惜しいですが、今日はここでお暇させて戴きます」

「私もお婆あの病院に行かないといけなくてな。悪いが今日は帰らせてもらおうぞ」

「あ、自分もサークル見学でも行こうかなと思ってます。： できたら一緒に行きませんか？」

「いいねー、一緒に行こー！」

「はい！ありがとうございます！…ただ、朝の一件がちよっとトラウマで…」

「あー、じゃあグイグイくるとこは河野ちゃんには厳しそうだね、運動部とかはじゃあなしだねー」

「そうですね…それに、元々運動部はあまり考えてはいませんでしたし…」

「あら、では河野さんはどんなサークルにご興味があるんですか？」

「どんな…そうですね…」

（この世界の情報収集も踏まえたサークルに入りたいな…となると）

「色々と戦車道の知識や歴史に詳しい方がいるとか、それを扱ってるサークルを見てみたいなって思ってます」

（まずは見識者の知り合いを作りたいしな）

「ふふっ…それならびつたりのサークルがごきますよ」

「ほんとですか！詳しく教えてください！」

「ええ、部室の場所が…」

——大洗大学 西校舎 部室

「よしっ、踏破！これで全国制覇ぜよ！」ピコピコ

「うわーん、また負けてしまいましたー！」ピコピコ

「相変わらず弱いなあグデーリアン」

「くっ… もう一回！もう一回お願いします！」

「いいだろう、かかってくるぜよ」

「はあ… 相変わらずといえ、このメンツも大学生になったというのに全然変わらんなあ」

「そういえば… 噂だと我が校にも初の男が来たらしいぞ、ファーストなんたらつて…」

「らしいですねー。まあ我々には関係ないですけどねー」ピコピコ

「なっ… ここで消極的になってどうする！女は度胸！こういう時こそロンメル將軍を見習ってだな…」

「負けるが勝ち戦法ぜよ。ただでさえ競争率高いだろうに… 負け戦以前にお姿を拝見する機会すらないかもしれないぜよ」

「そうそう、大学に入ったからにはそんなものにつつつは抜かさず、将来のために教養を高めるべきでありますよ」

「いうなら、クドウーツフの大戦略だな」

「いや、孫氏の戦法がわかりやすい」

「豊臣秀吉の思想が的を得ている」

「「それだ!」」

「お前からそれでいいのか!」

「コンコンッ

「ゆかりーん、ちよつといいー?」

「はいはい、いま出るでありますー」ガララッ

「あー武部殿! どうしたでありますか?」

「今日つてさサークルの見学とかつてできたりする?」

「もちろんやつてるでありますよ!」と云つても特に何か用意してるわけではないですが、えへへ。あつ、見学して行くでありますか?」

「あーいや! 見学したいのは私じゃなくてー!」この子なんだけど、戦車道とか歴史系に興味あるんだつて!」

「もちろん歓迎であります!」つてええ!? 男の子!」

「よかつた! じゃあ悪いんだけどよろしく!」

「よろしくつてつ!」武部殿は!」

「ごめーん! お願いねー! あつ! めっちゃいい子だから心配しないでー!」

「ちよつとー!! そういう問題では!」

「あの! すみません、ご迷惑でしたら別の日でも!」

「い、いえ！全然大丈夫です！多分：．． ちよつと待つててください！ すぐ準備しますから！」パサツ

「あ、はい！ お気になさらずに！」

（ん？ 何か落としたぞ：．．？ ハンカチ？）

ガララツ

「えー、皆さま、我がサークルに初の見学希望者が来たのであります：．．」

「なに！ それは吉報だな！ 歓迎しよう」

「同学年か？ 物好きな奴もいたもんだ」

「どんな女であれ、我々は拒まないぞ？ 歴史好きに悪い女はいないしな」

「あー：．． えーつとそうじゃなくて：．．」

「歯切れが悪いな、どうしたグデーリアン、我々は構わん、入らせていいぞ？」

「あー、じゃあ心の準備だけ：．．」

カラカラ

「あ、あのー：．． ゆかりさん？ ハンカチ落としましたよ？」ヒヨイ

「あつ：．． ちよつ」

「「「ええええええええええ！？」 男の子（ぜよ）！？」」」

—————

「こ、この椅子に座るであります…。」

「あ、ありがとうございます。えつと…なぜ皆さんは正座で地べたに…？」

「き！気にしないでください！我々はこちらの方が落ち着くので！とりあえず軽く自己紹介をお願いします！」

「え、あ、はい！大洗大学一年、河野つて言います。よろしくお願いします…。」

「…ほ、本物か？我々は白昼夢を見ているのでは…。」

「夢でも十分幸せせよ…。」

「あ、気のせいかなんかい匂いする気がする」

歴史のポスターとゲーム機が散乱している部屋には真ん中に長机と椅子が置いてあった。午前中の女の人たちとは打って変わって全くこちらに近付こうとはせず、何か警戒しているのか全く目を合わせてくれない。

（まあ、これが普通の反応だよな、俺だって急に女子きたら緊張するし…。）

「お、おほん。では我々も軽く自己紹介するであります。私、秋山優花里と申すであります。好きな分野は戦車全般です。では皆様も…。」

一通り名前と、それぞれの得意分野について教えてもらった。

秋山さんが戦車道関連、他の4名が歴史関連で詳しいメンツで集まっているようだ。うん、確かにこれは期待ができる。あの3人の人脈に救われたな。

「皆さん、よろしくお願ひします！」

（外国人の方もいるのかな…？ まあ、今は突っ込まないでおこう…）

「あー、じゃあえつと… 不躰ですがどうして我が部に？」

「実は、戦車道と歴史に興味がありまして！ 優花里さん含め皆さん詳しい方とお知り合いになれるサークルがあればなーと思ひまして」

「な、なるほど…。確かにそれなら我がサークルはぴったりではありますが… いいのでありますか？ 自分たちで言うのもなんですけど活動内容は地味ですし、退屈かもしれないよ？… 今日だってゲームやってるだけでしたし…」

「むしろその方が嬉しいです！… 正直グイグイ来られる方々が少し怖くて…。仲良くなれたら、サークル外でもその… 色々と教えてくれると嬉しいなと思ってます！」

「色々と…」

「教える…」ゴクツ

「？ 皆さんどうしました？ 俺、何か変なことでも…」

「あー！ 気にしないでください!! ほんと！ なんでもありません！」

「え、ええ… わかりました」

（一瞬全員の目が怖かったのは気のせいか…）

「それにしても、よく我々がサークルを新設したことを知っていたでありますな。ご興味ないと思ってお伝えもしてなかったのに」

「実は一緒にいた五十鈴さん、という方が学生自治会をやられていて……部室の場所とかを教えていただきました。その場にいた武部さんには親切心でここまで連れて行ってもらいまして……優花里さんのことについても少し教えていただきました」

「あーなるほど。それで武部殿と……というか何故下の名前で……？」

「あ、すみません。武部さんからそう呼んだ方がいいと言われたので……ご迷惑でしたか？」

ドキツ「い、いえ！ 全然！ むしろ嬉しいというか……あ、いや変な意味じゃなくて！」

「よかった！ じゃあこれからは是非仲良くしてください、優花里さん！」ギョツ

「ふえっ!? あっ！ よ、よろしく願いますのであります！」

（近い！ 近いであります!! あ、でもいい匂いする……じゃなくて!）

ガタツ「じ、実は私、本名は里子という名前なのだが……そ、そう呼んではくれないか？」

「なっ！ エルヴィン！ 貴様！ ソウルネームを捨てるのか!？」

「う、うるさい！ ひなちゃんとやらがいるお前にはわかるまい！ 名前呼びは女の夢

だー！」

「もちろんですよ！よろしくお願いします、里子さん」

「あつ… すごい、なんだこの破壊力、マウスの砲撃並だ…」

ガタツ 「じ、自分も武子と呼んでくれぜよ！」

「私も清美で…」

「き、貴様らまでーっ!! 誇りはないのか!!… そ、それに河野さんだって迷惑だろうに…」

「いえ、全然構いませんよ！これから色々とお世話になるかもしれませんし！」

「ま、まあ河野さんがいうなら… まったく、お前ら、いい人だったからいいものを…

厚かましいにもほどがある！初対面だぞー！」

「まあまあ、名前で呼んでいただいた方が親近感も湧きますし…」

「そ、そうぜよ！ これはあくまで仲良くなるための工夫ぜよ！」

「いいわけなんぞききたくない！ 大体、ソウルネームというものはだな…」

「あ、カエサルさん… はそのままでもいいですか？ お名前でお呼びしても全然…」

「えっ!?!… えーつと…」

「なんでも構いませんよ」

「じゃ、じゃあ… たかちゃん… えへっ」

「お前が一番厚かましいわ！」

（：面白い人達でよかつた。この人たちなんか男子高時代を思い出すノリだな）
意外にも奥手な人には小悪魔気質な河野さんであつた。

――

??? 「へえ、大洗大学に男がねえ……。直々にどんな奴か会いに行つてあげようかしら」

第6話 K様

くあの世界的イケメン女優K様が、先日プラウダ大学戦車部に入学されました！警備員100人体制という異例の厳戒態勢で行われた入学式では各地からファンが押し寄せ……

「うわあ！ かつこいいー!! いいなあ…… 学校さえなければ絶対見に行つたのに……」

「へえ…… このちんちくりんがイケメンねえ……」ズズツ

なんとか波乱の大学生活の1日目を終えた翌日の朝。相変わらず違和感しかないニュースを弟が朝から張り付くように見ていた。

（昨日のサークル見学で得た情報から察するに…… 逆転してるのは価値観だけじゃなさそうだな……）

テレビに映っているイケメンと称される女性は元の世界では所謂「コンプレックス」に該当するであろう特徴を持ったものが多かった。低身長や小柄な体型、もしくは貧乳などが「モデル体型」であるとされ、この世界においてはかなり高いステータスとなっているようだ。テレビに映っている小学生にしか見えないような女性が持て囃されて

いるのがいい証拠だ。

「あー… いいなあ… この前のハリウッド映画も最高だったし… サインだけでも欲しかった」

「ぶっ！ は、ハリウッド!? このちんちくりんってそんなにすごい女優なのか?」

「はあ!?!お兄ちゃんK様も知らないの!?!」

「おい、近いつて…。知らないよ、あんまり興味ないし… 好みじゃないしな」

（スタイルだけなら五十鈴さんとかの方が全然いいしなあ… 俺の世界では）

「好みって… こんなの一般常識だよ。ルックス抜群、イケメンで、カリスマ性もあつて、お金持ち。たとえ他の要素をかけてたとしても、こんなステータスの塊みたいな人、嫌でも情報入ってくるでしょ普通!」

「… へ、へえー。それはすごいな」

（目が本気で怖い… とりあえず黙って聞いとこ…）

「ふっ… ふっふっふ… しようがないな!私K様ファンクラブ会員が!K様の魅力を1からたっぷりと教えてあげるよ! 長くなるよー!」

「え? いや別にそこまでは… てかお前ファンクラブなんて入ってるの!?!」

「まずは何と言つてもこの顔立ちの良さからだよね! 確かに他のモデルにもこういうイケメンはいるけど、K様は段違いで…!」

「はあ… 龍弥のやつ、家出る直前まで話し続けやがって…。おかげで2日連続で遅刻ギリギリだよまったく。」

「お、おはようございます！ 河野さん！」

「あ、おはようございます、優花里さん。昨日はありがとうございました！」

「いえ！ こちらこそ…。その色々とありがとうございました…。貴重な体験でした…。」ぼそつ

「貴重…？ 俺なんかしましたっけ」

「あー！ いえこつちの話です！ 気にしないでください！」

「は、はあ… ん？ 正門前、随分人ばかりできてますね…。何かあったのかな？」

「うーん、大学側での催し物は特にはなかった気がするのですが…」

大学前には生徒であろう女性の人がだかりに混じって、近くから来たであろう、一般の野次馬も集まっており、パツと見ただけでも100人以上はいるだろう。大学側も警備員を総動員して騒ぎを鎮めているのが見て取れる。

「あ！ あの走ってるのって…。おい！ 武部殿！」

「あー！ ゆかりん！ それに河野ちゃんも！ 二人もあれ目当て!？」

「あれ…？ あの人だかりのことでありますか？」

「えっ!? 知らないの!? 今うちの校門前にK様来てるんだよ! 本物だよ!!」

「K様って... うええ!」

「こんな機会滅多にないよ! 二人も行くでしょ!? モテモテのコツ盗んでやるんだから!」

「は、はい! 一目見ておきたい感じはありますね!」

「あー、いや俺はいいかな...」

「えー!? あんなイケメンが目の前にいるんだよ!? 私男だったらもう惚れてるレベルだよ!」

「え、ええ... かつこいいのかもしれないですけど... あんまり興味がなくて...」

「それは聞き捨てならないわね! ノンナ! あの男のところまで道を作りなさい!」

数百人はいるであろう人混みを一瞬で退かした二人の高身長な女性を作った花道から歩いてきたのは、やはりテレビで見た通り、ちんちくりんの小学生にしか見えないような少女だった。周りがざわめく中、ゆつくりと自分の前に立ちはだかった(小さいから自分が見下してるけど)彼女はあらんばかりの笑顔で話し始めた。

「おやおや... 随分大口叩く子猫ちゃんがいると思つたら... あなたが噂のファーストワン様かしら?」

「ファースト... あ、なるほどもうそんな呼ばれ方が... えっと... はい、多分そうです

けど……」

「へえ…… あんたがねえ…… ふーん……」

少女はまるで品定めをするように自分の周りを回りはじめ、じろじろと全身を舐め回すように見られた。元の世界では気にしたこともなかったが、案外あまり気分のいいものじゃない。

「少し芋っぽいのが気になるけど…… まっ及第点つてとこね!」

「あ、あの…… 何か俺に用ですか…… ? もう学校にいきたいんでどいてもらえると助かるんですが」

(なんでこんな上から発言なんだこいつ……)

「ふふっ…… あっははは! さっきの発言といい、このカチューシャ様に対してそんな生意気な態度とる奴初めてよ。それに言つとくけど、私はあるにわざわざ会いに来たのよ。そのカチューシャ様を差し置いて学校なんて…… 私に恥をかかせるつもり? こっち優先に決まってるでしょ!」

「はあ…… わかりました…… あの、もう1限始まっちゃうんで、何かあるなら手短にお願いたいです……」

「ふふっ…… あっはははは! あんた本当に面白いわね!…… そうね、気に入ったわ。あんな私の限定ファンクラブに入りなさい! 私が許可するわ! ノンナ! この子猫

「ちゃんに会員証を！」

「だから、興味ないですって……ファンでもないですし……」

（ん？ このカード……どつかで見たような……）

「はあ!? 私がここまでしてあげてるのに拒否するとかどんな神経してるわけ!? いいから受け取りなさいよ！」

「だからいらないうですって！」ポスッ

「こ、こいつ！ムカつくわねほんとっ!! いいわもう！ポツケに無理矢理にでも……ってあら？これは……私の会員証？」

「はあ……興味ないって言ってるのに持つてるわけないじゃないです……ん？」

———出発前

『お、おい、もうわかったからそろそろでないと!』

『えー!まだ語り足りないのに……あつ!じゃあ帰りにファンクラブショップでも寄つてつてよ!僕の会員証貸してあげるからさ!』

『だから興味ないって……金もないし』

『大丈夫!これがあれば全品半額くらいで買えるんだから!物は試しさ!ほらっ!入れとくからね!』

『ちよ!ポツケに勝手に入れんな!あーもういいや!行つてきます!』

「やばい…： ということはあるは…：）」

彼女が拾ったのは無理やり渡そうとした新しい会員証とは別の物。すでに『カチューシャファンクラブ 会員証 河野』と書かれた既存の会員カードだった。状況を理解した彼女は先ほどまでとは打って変わって大層ご機嫌になった。

「へえ、なるほどねえ…：。私に興味がない…：。ねえ…：。じゃあこれは何かしらねえ」
「ちがつ！ それは弟ので！ たまたま今日ポケットに押し込まれて！」

「河野殿…： その言い訳は流石に無理が…：」
「本当なんだって！ そうとしか言いようが」

「ふふつ、はいはい、わかってるわ。ムカつく男だと思っただけど、照れ隠しだったのね。案外かわいいところもあるじゃない…：。私本気で気に入っちゃたかも」

「カチューシャ様、そろそろお時間です。車の準備はできてますので…：」

「あら、もうそんな時間なのね。じゃあ、はい、これあんたの会員証。裏に私の連絡先書いといたから、いつでも連絡してきなさい。こんなことするのあんたが初めてなんだから、光栄に思いなさいよ」

「あの一！ だから誤解ですって！ これはたまたまポッケに入ってただけで！」

「はいはい、もういいわよ、それは。今度会うときはもつと素直になあんたに期待してる

わ

「ちよまつ：： まだあんたは誤解を！」

「じゃーねーピロシキー☒」

「あ：： 最悪だ：： 終わった：：」

高級車に乗って走り去ったK様もといカチューシャファンクラブ会員証を握りしめたまま、跪く俺。

その後、その様子を見た生徒から『本人の前では性格が変わってしまったうほどの熱狂的なK様のファン』という噂が大学中に広がり、『共通の話題作りができるかも』と、他の女子生徒の大半がK様ファンクラブに加入するほどの騒ぎとなるのだった。

第7話 飲み会

「見てよ！ 河野さん！ これK様のストラップ！ 2つ買ったから良かったらどう？」

「あ、どうも、でも俺は別にK様は……」

「ねえねえ！ ほら！ K様と同じ髪型にしてみたけどどうか？ こういのがタイプなんでしょ？」

「え、いや別に……」

「河野さん！ 良かったら今度K様がでるドラマの撮影会に……」

食堂

「はあ……なんだろうこの疲労感……」

あの事件以降、すっかり『K様ファン』という噂は広がってしまい、大学は今作り出されたK様ブームでてんやわんやの状態だった

「河野殿の影響はすごいですね。今やこの大学で入っていない方が少数派になりかけてますよ」

「まあ大体は河野さんと話題が合うだとか、口実ができるとかいった下衆な輩ばかりだ

がな。：： 全く、恥を知れ」

「一番最初にFC加入した麻子がいつても説得力皆無だけどね」

「大学の公式グッズにもK様の商品入ったらしいし。：： あー！すごいよ！プラウダとの合同オープンキャンパスの計画もたってるって！」

「もう誤解だなんて言える雰囲気じゃないですよ。：：」

「申し訳ないであります。：： あそこで私が否定していれば。：： まさか本当に弟殿のものだったとはつゆ知らず」

「まあ。 タイミングが悪かったとしか。：： 言えまへんね。：： まあ、少しふれば。：： 噂も自然と無くなるでひょう」モグモグ

（クツソ、こいつ。：： 他人事だからって幸せそうに飯くいやがって。：：）

「うーん。：： じゃあ少し気晴らししない？」

「気晴らし。：： ですか。 そうですね、いつまでも悩んでも解決することじゃないですし」

「で、言い出しつぺは何かいい案でもあるんだろうな」

「ふふーん！ これだよ！これ！」

沙織さんがバックから取り出したのは一枚のチラシ。 どうやら最近この近くに新しく居酒屋ができたようだ。

「大学生といえ、飲み会！親睦を深めつつ！お酒で時間を忘れようよ！」※この世界は18から飲酒できる世界線です（後付け）

「いいでありますね！ 私実は飲めるようになってから一回も飲んだことないんですね！」

「居酒屋のお料理は大層美味と聞いておりますし…行きましょう！」

「私も好きだから別に構わんが…河野さんはどうする？」

「うーん…自分も飲んだことないし…ちよつと怖いかも」

「まあ、心配しなくても、みんな酒に関してはおなじくらいのレベルだ。無理に飲ませる気もないし、親睦を深める食事会だと思ってみてはどうだ」

「食事会…そうですね…じゃあいつて…見ようかな」

「やったね!! 決まりだ！ じゃあ席空いてるか確認するねー！」

（ナイスまこ！ファインプレー！）

「いやあ、楽しみであります！是非親睦を深め合いましょう！」

「あ、あはは…お手柔らかに…」

こうして、大学入って初の飲み会が開催されることとなった。

—————（ここから別視点）

「はあ…また戦車道の練習長引いちゃった。もうこんな時間だよ…」

付けていた時計を確認すると丁度20時を回ったタイミングだった。高校3年の秋頃から私は戦車道連盟に声をかけられ、早くも推薦で大洗大学に通っていた。推薦が決まった後からは、練習以外の勉学等は一切免除され、その分空いた時間は大学へ足を運ぶ生活となり高校にはほとんど顔を出さなくなっていた。やりたいことを好きなかけしているこの生活が充実しているのは間違いないが、それと引き換えに疎遠になってしまった友人も多くいる。

「…みんな怒ってないといいな。久しぶりに会うのに大遅刻だし。」

時を遡ること一時間ほど前だろうか、練習の合間に電話が来た。それは高校の頃からの友人からだった。「久々に会いたい、紹介したい人が居る」と唐突に連絡がきたのだが、もうだいたい出来上がっている様子のその人はどうやら大学の近くに居酒屋にいらしたうだった。

『行けたら行くね、練習長引いちやうかもだから。私のことは気にしないで』

曖昧な返事。本当は這ってでも行きたい、かけがえのない友人たちからの久々の誘いだ。だが、それ以上に疎遠になった友人たちがキラキラしているのを見ると自分の進んだ道に揺らぎが生じそうで、怖いと言う感情が押し寄せ、私の返答を重くした。

結論として練習しながら私が出した答えは「途中から参加して、様子を見る」と言うなんとも情けない答えだった。

「ついた。．．． あ、連絡連絡。LINEを部活仲間以外に送るのも久々だな。．．．」ピコン

だが、既読はつかない。まあその場だ。話に花を咲かせているのかもしれない。ため息をつきながら店に入り、周りを見渡していると大声で呼び止められた。

「おーい！みぽりいいん！ 久しぶりい！」

「わ、わあ！ 沙織さん！久しぶりって。．．． 大丈夫？！」

上気した顔の友人は私を見て近づいてくると、間髪入れずに抱きついてきた。ずつしりと重たくのしかかる彼女はほとんどフラフラ状態だった。

「おい、沙織、お前酔いすぎだぞ。．．． すまんな西住さん、こいつ見栄はつてガンガン飲んじやつてな。もうダメそうだから今からタクシーに乗せるところだ。．．． きたばかりで申し訳ないがこいつ送るから私とこいつは帰らせてもらう」

「あ、うん。．．． 気にしないで。遅れちゃったのは私だし」

「すまんな」と小声で言うのと沙織をおぶってタクシーに乗り込んだ。まあ、しようがない、せつかく来たんだし、残っている友人と話そう。そう思い麻子さんに席を尋ねると、先ほどよりもさらに申し訳なさそうに口を開いた。

「あー。．．． 席はその、奥の個室なんだが。．．． 一緒に来てた五十鈴さんは急な用事で、秋山さんは沙織よりもさらに早く潰れてしまつてな。今部屋には河野さんって子しかいないんだ」

「河野さん……？ あー沙織さんがいつてた紹介したい人？」

「そうだ。だが状況が状況だしな……もうこのまま解散の方が……いやしかし来てもらつて早々申し訳ないし……」

「全然大丈夫だよ！ その子一人なんですよ、挨拶がてらちよつとお話して帰るから気にしないで！」

「そ、そうか……流石だな西住さんは……ありがとうございます。じゃあすまんが行かせてもらう……またいつか飲もうな」

走り出したタクシーを見送つて、ふつとため息をつく。

「『またいつか』か……そうだよね。次いつ会えるかわからないしね」

高校の頃の『また明日』から『またいつか』に変わった彼女の最後の言葉はやけに遠く感じ、一人になった自分を余計に寂しくさせた。それを紛らわすように店内に入り、先ほど教えてもらった席の襖を開ける。中を覗くとビックツと驚いた男の子がこちらを見ていた。

「え、えつと……あなたが河野さん？」

「は、はい！ よろしくお願ひします！ 西住さんですよね！」

「え……あ、うん！ よ、よろしくね……」

予想外、まさかの男の子。大学に一人だけ男子が入つたと聞いていたが、まさかその

一人じゃないだろうとタカをくくっていたのだが……。絶句して立ち尽くしていた私を見て悟ったのか、男の子が話を始めた。

「驚きますよね。戦車道の名門大学に男なんて……」

「……ううん！ 違う違う！ 単に沙織さんが会いたがっているって言うからつきり女の子がと思って！」

必死に否定して、急いで対面に座る。うん、何回見てもやっぱり男の子だ。

「あ、ああ……。なるほど、そうですよね。男なんて僕一人ですし」

「あーいやえつと……。そうじゃなくてね……。あんまり私自身男の子と交友なくてその……」

「あ、そうなんです、実は俺も女の子とはほとんど……。あはは」

「えつと……。ご出身は……？」

「気まずい。あまり仲良くない人と電車乗り合わせた時のようなギクシャクした会話。そんな当たり障りのない話題がいつまでも続くわけもなくしばらくして料理を頼み始めた。それと一緒にカクテルのお酒を頼んでいたので私も、と同じのを頼んだ。だが不思議と彼からは目を離せなかった。」

「……お酒強いんだね。みんな酔ってるのに一人だけピンピンしてるみたいだし」

「い、いや実は、自分まだ飲んでなくて……。沙織さんや優花里さんが張り切って飲みま

くつちやったみたいで：介抱したら飲むタイミング失っちゃったんですよ：あはは」

「あー、だから嵐がさった後にちよつと飲んでみようって感じか」

「ま、まあそんなところですよ：：ご迷惑はおかけしません！：：多分」

なるほど、みんなが酔いつぶれたのはこの子が原因かも。そりや目の前にこんな子いたら張り切りたくもなるかもね。でもこの子に飲ませないあたりやつぱりみんな優しいな。

「ん：：ぶはあ！　こ、これがお酒ですか！　へんな味ですけど：：嫌いじゃないかも：：」

「え、もしかしてお酒初めて？」

「おはずかしながらそうですね：：　今日も本当は飲まないつもりだったのですが、あまりに皆さん美味しそうに飲まれていて：：。特に華さん！　日本酒をぐいっとやっててかつこよかつたなあ：：」

「：：　へえ。まあ確かにかつこいいね：：　すみません！　私も日本酒ください！」

嬉しそうに華さんについて話す河野さんを見て、なぜかちよつともやつとした。あまり勝負事は好きじゃないがなぜかこの時は強い対抗意識を燃やし、背伸びして飲んだこともないお酒に手を出した。なるほど、これは確かに潰れるな。この子意外と小悪魔か

もしれない。

「に、西住さんも飲まれるんですね、流石」

「ま、まあね、ちよつと飲んでみる？」

お酒の力を借りて少しずつ打ち解けた私たちは結局、お店の閉店時間までたわいも無い会話を続けた。元々お酒に強かった私はなんともなかったのだが、河野さんは弱かったようで、帰り道はフラフラだった。「帰れます、西住さんに迷惑かけたく無いです」と懇願されたが、こんな状態の男の子を見捨てて帰れないと、無理やり肩を貸し、家まで送ることにした。だが、その途中、事件は起きた。

「いたいた．．よお、西住流。男連れて歩いてるなんて随分浮かれてんねえ」

「おたのしみの中のとこ悪いけどさあ、あんた強いんだつて？ お相手してよお」

はあ．．またか。ピアスをつけた金髪の女性の3人組がこちらに近づいてきた。

大洗高校が優勝した後、西住みほの名は瞬く間に全国を駆け回った。『軍神』『最強の後継者』『真西住流』などなど。私が金になると思ったメディアの誇張や、誤解を呼ぶような二つ名が流布したことで『西住みほは喧嘩に強い』という謎のデマがここ数ヶ月流れているようだった。もちろん、喧嘩は強く無い上、勝負事も嫌いな私なのでそのような輩に会うたびに逃げるように退散していたのだが．．．。今は彼がいる。

(うーんどうやってこの場を切り抜けよう．．．とりあえず河野さんだけでも先に．．．)

思考を巡らせていると肩に乗った重みがふつと消えた。

「や、やめろ！ チンピラども!! みほさんに手を出すな!!」

ガクガクと震える足を必死に抑えながら私の前に立っていたのは河野さんだった。一瞬唾然とした表情した女たちだったが、すぐに全員がゲラゲラと笑い出した。

「あつはは！なんだこの男！しっし、女3人に勝てるわけないだろ、すつこんでな。お前には興味ないんだよ」

「ちよ、ちよつと！河野さん!? 何してるの!?!」

「もうこれ以上迷惑かけられません」

「迷惑って… あなたじや無理だよ！ 私のことには気にしないで、ね?」

必死に勇気を出してくれている相手をここまで真つ向から否定するのは辛いけど、これも彼のためだ。だいぶ酔いも冷めてきてるみたいだし、とりあえずは逃げてもらって…

「嫌です、友達を… 仲間を見捨てることなんてできません!」

会ってから初めての否定の言葉。だがなぜかその瞬間、黒森峰にいた頃の自分になった。

その言葉に呆然としている私を置いて、勇敢にタツクルした彼の頭はチンピラの一人の腹に思い切り当たった。

「つてえな！ 男だからつて容赦しねえぞ!？」

少しは効いたようだがやはり男の非力さではどうしようもなかったようで、即座にカウンターをくらくらいうずくまる彼。だが、すぐに起き上がり必死に足にまとわりつく。

『仲間を見捨てられない』その言葉が頭で反復する。

(そうか… この子から目が離せない理由って…)

—— (別視点)

いつしか失神していた俺が目を覚ますと、横たわる3人のチンピラを尻目に誰かに膝枕をされていた。愛おしそうに俺を眺めていた彼女の目からは涙の粒がポタポタ流れ、自分の顔に垂れていた。

「よかった… 本当に良かった…」

消え入りそうな声で自分を包む。それが誰なのか、全く状況もつかめないまままた俺は深い眠りにつくのだった。

第8話 姉との再会

「んっ… あれ… ここは…」

俺は目を覚ますと、知らない場所の知らない布団で眠っていた。寝ぼけ眼をこすってしばらくして、ハツと我に返って起き上がる。キョロキョロと周りを見渡すとどうやらここは大きな和室のようだった。

「えーつと… 昨日はみんなとお酒飲んで、後から西住さんがきて… うっ」

やけに鈍い頭痛、そして体験したことのないような気持ち悪さが全身を覆った。どうやら昨日は初めてののくせに相当飲んでしまったようだ。そうか、これが二日酔いというやつか…。しかし… ここはどこだ。だめだ、頭が回らない。

「あ、起きたんだ。おはよう」

襖がすつと開かれて入ってきたのは西住さんだった。膝をつき自分と視線を合わせるとそのままぎゅつと自分の手を握った。

「昨日はありがとね…。私本当に嬉しかったよ。怪我は痛まない？」

「き、昨日？ すみません、自分何かしました？…全然何も覚えてなくて」

「ええ!? 覚えてないの!? 君、めっちゃくちやボコボコにされてたよ!」

「……ボコボコにされてたんですか!？」

こめかみに人差し指を押し込み、考え込む。思い出せ、思い出すんだ……。昨日自分は
何をしたんだ……。

「そう! ……ボロボロになりながら! もうすごかったんだから!」

こう、お腹の辺りをボンって蹴られてね! とジェスチャーを交えつつ嬉々として詳細
を説明する西住さんに少し恐怖を覚えた。だが彼女のいうことは事実のようで、確かに
自分の体は包帯やら絆創膏やらでひどい状態だった。なるほど、彼女の話で大体昨日の
出来事はわかった。

「……あの、でもそれって話を聞く限り俺は何も……ただ虚勢を張って負けただけで
すよ」

「私はそれが嬉しかった。その“虚勢”がどれだけ人を勇気づけられるか……思い出せ
たんだから」

『何かあったのか』そんな疑問がふつと浮かんだが、もう一度強く手を握った彼女の目
は、何か迷いを捨て去ったような、そんな凜とした目をしていて、聞くのは野暮な気が
してそつと心じまった。

「入るぞ。みほ、朝食ができています。そろそろ食べないと遅刻するぞ。客人の具合はど
うだ」

「あ、お姉ちゃん、ごめんね、朝ごはん手伝えなくて。行こう河野さん……ん？どうしたのお姉ちゃんのこと見つめて……」

間違いない。電車で助けてもらった女性だ。でも、どう声をかけよう……相手が覚えていなかったら……。そんなことをぐるぐると考えている間の沈黙に耐えかねたのか、西住さんが話し始めた。

「ど、どうしたの二人とも……知り合いなの？」

「え……ま、まあ名前もわからない程度だが一度あつたことは覚えている……。だが」

「あの時はありがとうございました。一度お礼したいと思つて……。まさかこんなところだ」

「お礼……？ 私に……？」

そういうと彼女は人差し指でこめかみをぐつと押し、すまん……ちよつと待て……

とつぶやきながら考え込んでいた。あれ、このパターンは……

「すまん、あつたことは微かに覚えているのだが……なんかその……すまん」

バツが悪そうに私を見つめる彼女。どうやらこの人とは似た者同士らしかった。

食卓に連れられ、部屋に入ると朝ごはんとは思えないような豪華な和食がずらりと並んでいた。話だと西住さん自身、実家に帰ることが珍しいらしく、事情はわからないが、

「ご両親は不在とのこと、姉が朝から張り切ってしまったらしい。」

「本当、作りすぎだよ、お姉ちゃん。こんなに食べ切れないよ、ふふっ」

言葉とは裏腹にそう言って笑っていた彼女は心の底から嬉しそうだった。

「ご馳走様でした」

「ん、お粗末様でした。みほは準備しなさい。後片付けはいいから」

「で、でも…… 悪いよ。泊めてもらった上に朝食も作ってくれたのに……」

「気にするな、ここはお前実家だ。たまには姉らしいことをさせてくれ…… 高校ではあ

まり構ってやれなかったからな」

「お姉ちゃん……」

「それに、今日は久々の休みでな！何かしてないと落ち着かないんだ…… だから気にするな」

「…… うん、わかった。ありがとうお姉ちゃん」

「あ、ちよつと待て」

「ん？どうしたの？」

「おかえり、みほ。またいつでも連絡してこい」

「うん…… ただいま…… じゃあ準備してくる！」

嬉しそうに洗面所に走っていくみほさんの姿と入れ替わるように、自分は無意識に洗

い場に立っていた。

「あ、あの！ 俺も手伝います！ せめて自分の分だけでも！」

「なつ、何を言っている。君は客人だろ。いいから君も準備しなさい、学校はないのか？」

「手伝います！ 俺も今日何も無いんで!! 何かしないと落ち着かないので!!」

事情を知っているわけでもない、この人のこともよく知らないが、なぜかその時は彼女の役に立ちたいと思った。

間髪入れずに、強引に皿を洗い始める。西住のお姉さんも自分と同じ言い訳をされてしまい、返す言葉がないのか「じゃあ、皿洗いだけだぞ。」となし崩し的に許可してくれた。

テーブルの食器類は全て洗い場に移動され、洗い場で二人、並ぶ形で後片付けをしていた。しばらくは無言で洗い続けていて彼女だったが、ポツリと自分に話を振り始めた。

「昨日の件は感謝する。妹のことを救ってくれてありがとう」

「へ？ いやいや！ だから自分何もしてないですって! : : あんまり覚えてないけどボコボコにされてただけですし : : 百歩譲ってみほさんの引き立て役ができたくらいですよほんと！」

「：： いや、君は救った。確かに妹をな。：： 私にはできなかった」

「：：： 妹さんと何かあったんですか？」

食器を洗う手が少し止まり、悲しそうに俯く。できなかったという言葉をポツリと呟いた彼女は、またしばらく無言にな離、食器を洗い直し始めたが、またしばらくして一呼吸を置いた。

「：： 西住家の身の上話になる。湿っぽくなってしまうかもしれないが：： 聞いてくれるか」

ははっと慣れていないのか、ぎこちなく笑った彼女はゆっくりと語り出した。

第9話 託された想い

「さて……どこから話そうか……。昨日の飲み会ではみほから戦車道に関して何か聞いたか？」

「戦車道に関してですか？……うーん、高校からやってた……とか大学のチームに所属している……くらいは聞いた気がします。あ、後、お姉さんもそうですが西住流っていう戦車道の家系だとか……くらいですかね」

「そうか……。実はな、みほはああ見えて高校時代は戦車道全国大会で優勝しているんだ。その影響で大学の選抜チームからの推薦が来てな。大学のチームに現在は所属しているんだ」

「そ、そうだったんですか!? すごいじゃないですか!?!……あれ、でも『みほは』ってことは……お姉さんは違う高校だったんですかね？」

「ああ、初めは同じだったのだが……色々あつてな。妹は大洗女子高校という戦車道には無縁の高校に転校したんだが……」

そこから聞いた話はまるで絵に書いたような夢物語だった。転校した高校で素人の集団を集めて戦車道大会に挑んだこと。優勝することで廃校を防ごうとしていたこと、

そして転校の原因になった戦車道を自分の形で昇華し、自身の西住流でお姉さんを打ち負かし優勝したこと……。

どれもわかには信じがたいほど出来すぎた話だった。

「そ、そんなすごい人だったんですね……。全然知りませんでした」

「ああ、確かにみほは強い。素人集団の中での奇抜な作戦、的確な指示。大会を見ているものを皆熱狂の渦に飲み込むほどだった。周りの戦車道関連者もこぞつてみほに注目し、大学での活躍を期待されていた……。だが、みほは大学チームに所属してから半年間、全くと言っていいほど戦績を上げることができなかった」

「そんな……。それは周りからのプレッシャーに耐えられなかった……。とかですか……？」

「……。もちろんそれもあるかもしれない。大学のチームでみほは所属後いきなり分隊長を任せられていたからな。きっとチームメイトも高校の活躍を見て期待をしていたのは間違いない。しかしそれ以上にみほには根本的な問題があった」

「根本的な問題……」

「チームに所属してから約半年後、入学式からちようど一ヶ月ほど前だったか。みほから電話が来てな。『戦車道を続けている理由が見つからない』……。そんなことを私に相談してきた。思うような成績をあげられないのもそうだが、どうして自分は高校の仲間

との生活を捨ててまで、戦車道に打ち込んでいるのか……とな……君はどうしてだと
思う？」

みほさんが、大学で活躍できない原因……。高校との違いは……。

唐突に投げかけられた質問に戸惑いつつも、頭の中でもし自分だったらと考えた。そう
しているうちに自然と口から言葉が漏れた。

「……目的がないから……でしょう。先ほどまでの話を聞いている限り、みほさんは
他人に対して強い思いやりを持てる人間です。黒森峰の事件、高校での優勝も『仲間の
ため』という目的が常にみほさん突き動かしていた気がします……。しかし大学では
それがない……。だからみほさんの本来の力を出せていないのでは……」

夢中で話し終わった後、ふと我に帰って、お姉さんを見つめる。「ほう……。」と小さ
く感嘆をもらしたお姉さんの目は驚いたように目を丸くしていた。

「す、すみません、ペラペラと……。間違っていましたかね……」

「……い、いやすまない。驚いただけだ……。なるほど、みほが氣にいるわけだ。大した
考察力だ」

「あ、ありがとうございます……。え、えつと……。でもわかりません……。それと自分の昨日
の行動と何の関係が……？」

「……昨日みほが何度も話していたよ『今日、河野さんという人のおかげで戦車道を続け

る理由を思い出した』とな。

「思い出した……？」

「君が必死に自分を守っている姿を見て、高校時代を思い出したんだろう。みほは過去に友達を守ったように、大学の同じチームメイトを守りたい。そのためにもっと強くなりたい。そう言っていた……。守る仲間は過去の友達だけじゃない、そう思うきっかけを君が作ったんだ……。だから、これからもみほを支えてやってくれ……。あの子昔っから危なっかしくてな」

「はい……こちらこそよろしくお願いします！」

ぎゅつと自分の両手を握ったお姉さんは、先ほどの話始めのぎこちない笑顔とは違い、自然な笑みをこぼしながら自分をじつと見つめていた。手から伝わる温もりにはとても暖かく、そして心からの感謝の気持ち伝わるようで、自分も自然と言葉が漏れた。

「お姉ちゃん！何してるの!？」

静寂を破ったのは身支度が終わったであろう、みほさんだった。

その姿を見て気恥ずかしそうにぱつと手を離れたお姉さんは少し焦ったような早口で話し始めた。

「ちよつと皿洗いを手伝ってもらってな……。手が染みるというから少しあつためていたんだ……。べ、別に他意はないぞ!？」

「ふーん… そうなんだ…」

(いやそれ無理ありすぎるでしょ、逆に怪しいよ！浮気の言い訳かよ！)

(すまん… とっさにこれしか浮かばなかった)

(心の声にナチュラルに入ってこないでくださいよ！)

明らかに不信感をつのらせている様子のみほさんだったが、何事もなかったかのように自分に話を始めた。

「そうだ、河野さん。戦車道興味あるんだよね！」

「え、ええ。ありますが… どうしまし…」

「じゃあ、今日暇なら私の試合見にきてよ！会場まで案内するからーさ、いこー！」

「いい、今からですか!? まだ6時半じゃ…」

「練習風景から見て欲しいの！意外と面白いから！ね！」

先ほどの光景の再現のようにぎゅっと自分の手を握ったみほさんは、そのまま自分を引く張るように玄関まで連れていった。

「じゃあ、いつてきます！お姉ちゃん！… 私負けないから、戦車道も… 恋もね！」

「ふふつ… いつてらっしゃい… 安齋によろしく頼むぞ」

——

「ふつ… やれやれ、西住流も安泰だな… しかし河野… か。不思議な魅力を持った

男だ」

あの時にぎった手の温もりがまだわずかに残っている。

無意識に鼓動が昂っている。西住まほは河野に対する新しい感情が芽生え始めている。

??? 「えつと……今日の練習試合は大洗大学とか……会場はええと……」

「……」から大学までは歩いて15分くらいなんだ！ 着いたら寒いだろうから部屋に案内するね！」

「いやいや！ 悪いですよ！ 部外者ですし……」

「いーよいーよ！ 河野さんには特等席用意してあげるね！」

??? 「ちっ……カップルが朝からイチヤイチャして……朝玄関から一緒に登校とか少女漫画かっての……ってお前っ！ か、河野か!？」

思わず大声を出してしまい、驚いて二人が振り向く。

「……もしかして……ちーちゃん?」

安齋千代美は中学の幼馴染と再会を果たすのであった

第10話 幼馴染（過去編）

あいつに初めてあったのは私が当時中学2年生の頃。当時、親の転勤で引っ越してきた家のお隣さん、それが河野だった。

当時の私は眼鏡をかけており、全く人とは関わりを持たない人種だった。

… というかそうなってしまったの方が正しいかもしれない。

親が転勤族ということもあり、幼稚園から今まですでに4回は転園、転校を繰り返している。

もちろん1回目や2回目の時こそ、転校した先でも友達を作ろうと奔走していた。

だが、ドーセすぐに離れ離れになってしまう、そのことがだんだんと嫌になり、その後の転校先では周りと関わるのをやめた。

その頃からだろうか、私は本の世界に没頭するようになった。

学校に行くまでの通学路も、学校のお昼休みも、そして帰りも…。

私は片時も本を手放すことがなくなった。

当時の私にとって、本だけが唯一絶対に離れない友達だったのだ。

そんないつもどおりで5回目の転校初日、私は本を読みながら学校に向かっていた。その日の私は朝から最悪の気分だった。

（ちっ…：なんだよこれ、SFかと思つて買ったのにただの恋愛小説じゃないか。表紙に騙されたな…）

ただでさえ憂鬱な転校初日。

気を紛らわせようと買った本は私が最も苦手とする恋愛小説だった。

（くっそ…：キャッチコピーでミステリーだと思つて買ったのに…：詐欺だろこれ…：まあでもこれしか持つてきてないしなあ…）

「ねえ、何読んでるの？」ヒョコッ

「っ…！？」バサッ

突然現れた男の顔。ただでさえ人見知りの激しい私は思わず驚いて持つていた本を落とす。

申し訳なさそうに少し笑つたそいつは私の本を拾い上げ、表紙をマジマジと見つめて嬉しそうに私に話しかける。

「これ！乙女の戦車道シリーズだね！面白いよね！…：あ、ごめん！勝手に見ちゃつて」

「…：別にいいですけど…：。というかあなた誰ですか？ 私あなたのこと全然知らな

いんですけど……」

「あー！ごめんごめん！自己紹介まだだったね！俺隣に引越してきた河野っていうんだ！よろしく！……君の名前は？」

（あー……母親がなんか言つてたな……先日挨拶してきたお隣さんが同い年だとか何とか……こんな奴だったのか……）

「……安齋千代美……中学2年。これでいい？じゃあ私行くから」

「あ、ちよ、ちよつと！」

スツとそいつを通り去って、すぐに本を開き直して歩き出す。

このジャンルの本読むのは苦手だが、こいつの相手をするよりかは何千倍にも楽に感じた。

だが、本を読んで歩いている私の横にくつついて、河野はお構いなしに私に話しかけてきた。

（しつこいなこいつ……まあいいや、適当にあしらっていればそのうち興味もなくなるだろう……）

だが私のその予測とは裏腹に、次の日も、また次の日も、河野は私に話しかけてきた。

「本は結構読むのー？」

「……人並みには」

「俺こう見えて俺も結構読むの好きでさー」

「…… そう」

適当に塩対応をしながらでも本を読めるくらい慣れてきた頃、河野の口から少し気になる話題が飛んできた。

「俺好きになつたきつかけが引越したんだよね。母親が転勤ばつかで移動中退屈だったから暇つぶし程度に読み始めたら面白くてさー」

読んでいた本のページをめくる手が一瞬止まる。

（この男も転勤族だったのか…… となると自分と同じ境遇なんだよな…… じゃあどうしてこんなに積極的……）

「だから何でもいいからさ、何かお勧めの本があれば教えてよ！ ジャンルは幅広く読んでたから何でも……」

「…… ヘミングウェイの森」

「…… えっ!？」

「ヘミングウェイの森って小説。お勧め教えてついていたじゃん…… そんな驚かないでよ」

普段ほぼ喋りっぱなしの彼だったが、この時ばかりは口をぽかんとあけ固まっていた。だがしばらくして嬉しそうに笑うと、またいつもの調子に戻っていった。

「いやーごめんごめん！なんか具体的に返答してくれたの初めてだったから嬉しくて！読む読む！絶対読む！ありがとう！」

ちよつとした好奇心だった。

自分と同じ状況でどうしてここまで仲良くなるうとするのか、気になった。そんな些細なきっかけから本仲間として少しずつ心を開いていった。

「……いやあ、よかったねあれ。主人公がまさか最後に犯人になるなんて」

「だろ、大どんでん返して感じて最後まで飽きが来ない。いい作品だよな」

「ねー！ 推理ものはあんまり読んでなかったから新鮮だった！」

「……あ、そうだ。この前私が薦めた本読んだか？SFのやつ。私的のはあっちの感想の方が気になるんだけど……」

「あー！読んだよ！ 結構難しかったけど面白かった！ 特によかったのはねー……」

お勧めの本を教えるとはすぐにしっかりと読み、感想を伝えてくれる河野。そんな不思議な朝の時間は、だんだんと私にとって待ち遠しい時間になっていった。

そしてそれと同時に「河野」という存在も私の中では大きくなっていった。そのうち朝だけでは物足りず、時間が合えば帰りにも合流するくらい仲良くなり、好きな趣味を語り合った。

「……なあ、河野のお勧めも教えてくれよ。私ばかりじゃ不公平だろ」

あるいつもの朝の時間。私が不意にそんなことを口に出した。

「あー：：でもいいの？俺のお勧めだと恋愛小説になっちゃうし：：ちーちゃんそれ系苦手ですよ」

「いいよ、読書家としてたくさんのジャンルを読めるようになりたいしな。：：まあでも、初心者なのは変わりない。読みやすいやつで頼むよ」

「読みやすいやつかー：：うーん：：あ、そうだ！なら、土曜日うちくる？結構な数の恋愛小説あるからさ、貸してあげるよ」

「おー！いいねえ。そうだな実際に手に取ってみれた方が選びやすいしな」

「決まりね！また連絡するからー！」

ー土曜日

「いらっしやーい。まあゆっくりして行ってよ。うちに人呼ぶのなんて何年ぶりかなあ」

玄関が開かれ入った家は段ボールが積まれっぱなしになっており、必要な家具や電化製品以外はまだ締まったままの様子だった。

我が家も似たような状況なので妙に親近感が湧く。

「あー、段ボールとかは気にしないで。めんどくさいからそのままにしてるだけだから」

「わかるわかる！私も転勤族だからさ、いつ引越すかもわからないしな。いやあやつ

ばあるあるなんだなあ……」

「あ、ちーちゃんもそうだったんだ……まあいいや、さ！上がって上がって！俺の部屋は2階の角ね。ジュースとか持つてくるから先行つてて」

「お、おう。ありがとね」

転勤族……という言葉を聞いて一瞬河野の顔が強張る。

初めて見せたその悲しい表情に動揺したが、聞いていいものかもわからなかったのとおりあえず黙つて部屋に向かうことにした。

「……か……お邪魔しまーす」

河野の部屋は他の部屋同様、ダンボールが積まれており、こぎつぱりとしていたが、目を見張るような本棚にはびっしりと恋愛小説が詰め込まれていた。

「おいおい……予想以上だなこれは……。あつ……。へミングウェイの森だ……。ふふつ」

恋愛小説棚の下の方には私が薦めた本が丁寧に入れられていた。疑つてはいなかったがこうやって本当に読んでくれるとわかると何だか無性に嬉しくなった。

「こんなの薦めたなあ……と感傷に浸りながら眺めていると、ふとある本棚の横に飾られていた赤い宝石がついたおもちゃのブレスレットが目にとまった。ポロポロで何度も接着した後があり、相当大事にしているみたいだった。

「何だー？これ。ずいぶん汚れているようだな……」ガチャ

「ごめんごめん！お待たせ！… あっそれ…」

「あつすまん！勝手に触るつもりはなかったんだが… つい…」

「いやいいよ。そんなにボロボロだと目に留まるもんね」

「… ああ、嫌なら答えなくてもいいんだが、これはなんだ？ ずいぶん大事にしてるみたいだが…」

「それは前の学校の友達にもらったプレゼントだよ… 小学5年生くらいかな。結構仲良くなった子が初めて俺にくれたやつだから忘れられなくて… 今でもたまに身につけてるよ」

「前の学校か… そういえ河野はこれから転校の可能性はあるんだよな？」

「まあねー。むしろ今回は長いくらいだよ。ここにきてからもう1年半以上は引越してないしね。もしかしたら明日急に転勤になるかもしれないしね。神のみぞ知るっていや、親のみぞしるって感じかな… ははっ」

「…」

忘れていた。こうなるのが嫌で私は人を遠ざけていたのに…。

相手も転勤族なら尚更こうなることはわかっていたのに。

不意に思い出した残酷な真実に私は思わず声が出る。

「あ… ちーちゃん？ごめんつまらなかつた？あ、じゃあおすすめを…」

「じゃあどうして…。」

ん？と私を見つめる河野。こいつがいなくなるかもしれない。その悲しみは痛みになり胸を締め付け、その痛みは言葉に変わった。

「どうして離れるってわかって… 私と仲良くなるうと思ったの…？」

全ての始まりだった疑問は今、終わりに向かう2人の関係に再び現れたのだった。

つづく

第11話 別れ（過去編）

「どうして離れるってわかってて……私と仲良くなろうと思ったの……？」

「あつはは！ どーしたんだよ急に！ そんなしおらしいなんてちーちゃんらしく……」

最初こそおどけて半笑いだった河野だったが、私の切迫した声にこの質問が冗談ではないことを悟ったらしく、持ってきたジュースのお盆をスツと置いて静かに謝った。

「……ごめん、ちーちゃんの言いたいことはわかるよ。別れるときの辛さは俺もよくわかってるから」

その時の河野の表情は今まで見たことがないくらい真剣で、真面目で、そして……心の底から悲しそうだった。

「余計にわからん。結末はわかってる、なのにどうしてお前はそこまで人と関わろうとするんだ？」

『別涙喜会』って言葉知ってる？」

「べつるいきえ……？ すまん聞いたことないな。四字熟語なんだろうが……どういう意味だ？」

「別れるときの涙は次に再会するときの喜びにつながる……って意味の言葉だよ。ちー

「ちゃんがさ、俺に一番最初に話しかけたきつかけの本、覚えてる？」

「ああ、乙女の戦車道……だっけか。そういや好きって言ってたな」

「そうそう、実はさ、その小説好きになったのって作中に出てきたこの言葉がきつかけなんだよね……各地を転々とする主人公が友と別れる際に必ずかける言葉なんだけど、何だか自分の境遇に似てる気がしてさ。今じゃすっかりこの作品の大ファンだよ」

「なるほどな……で、それに感化されて友達を作るようになったってわけか……」

「そう！だからね！俺は……」
「くだらないな」

「え？」

「くだらないって言ってるんだよ！適当な小説の造語なんかはきつかけで私と仲良くなるうと思っただのか!? ふざけんよ、そんな綺麗事で私に話しかけたわけ!」

河野に出会った日が、今まで遊んだ思い出がフラッシュバックする。

楽しかった分だけ、別れるときの反動は恐ろしい、わかっていたはずなのに。

「ちーちゃん」

「そんなおままごとみたいな茶番に私を巻き込まないでよ！ そんなの私じゃなくなつて……よかつたじゃん!……お前なんかと……出会わなければこんな……」

言葉の意味はわかる。それがきつと人生において大切なことも。

きつと私は耐えられない。

こいつがいない世界が訪れる未来に、こいつと別れる日が来る事実に。きつと私は耐えられないのだ。

あのととき河野が声をかけてくれなければ、友達なんかになっていなければ…。

「…ちーちゃん、泣いてるよ、気付いてる?」

「へ?…あれ、本当だ… 何だこれ…」

はつと我にかえり、部屋の鏡で自分を見ると、確かに私は泣いていた。それとは反対に河野はなぜか少し嬉しそうにハンカチを渡してくれた。

「…確かに別れるのは悲しいし、辛いよ。俺もこんな目に合うなら最初から友達なんて作らないほうがって思ってた時期もあった…。でも自分から友達を作るようになってその考えは変わった」

「どうして…」

「ちーちゃんやこのブレスレットをくれた子を見て思ったんだ。友達になってよかったなって。そう思った瞬間気がついたんだ。本当に悲しいのは『別れること』じゃない、『出会いを放棄すること』なんだなって。俺はちーちゃんと友達になれて嬉しい。離れてしまおうとしても、その事実だけで俺は出会えてよかったなって思うんだ。だからさ…」

少し照れ臭そうに私の手をぎゅつと掴んだ河野は力強くこう話した。

「ちーちゃんも友達を作って良かったなって思えるように俺最高の友達目指すから！」
プツンと何か悪い糸が切れたような衝撃。そして握られた手の暖かさにその日私はまた泣いてしまった。

ー半年後

「千代美く。今朝のニュース見た？ 乙女の戦車道の映画、続編やるって！マジちよー楽しみなんですけど！」

「千代美！ すまん！ プリント写させて！ 締め切り今日なのすっかり忘れててさー！ プリン奢るからー！」

「千代美ねーさん、相変わらず大人気っすね」

「お、おいお前ら！ 一気に話すな!! …… あ、聡子、戦車道の続編はもうチェック済みだ。後で原作見せてやるよ、私の予想だとキャストینگは… ふふっ」

「… 相変わらずその話題だとキモいっすね、ねーさん」

「ちよー！ 無視しないで千代美ー！」

あの日から、私自身、あいつの影響で3つほど大きく変わった。

1つは友達を作ること恐怖心がなくなり、積極的に周りコミュニケーションをとるようになったことだ。

最初は不安だったが、元々私に声をかけようと思ってくれていた子が多かったらし

く、自然と友達が周りに増えていった。

2つめ：：これはいい影響かはわからんが、あいつに借りた『乙女の戦車道』にどハマリしてしまったことだ。

河野に薦められた最初の『乙女の戦車道』を皮切りに、今や小説だけにどまらず、映画、コミック、聖地巡礼など、あいつを付き合わせていくまでに：：まあいわゆるオタクになってしまったこと。

そして：：

「よし、今度続編の映画このメンツで観に行こうぜ。チケットの手配は私がするから！」

「えー、でもいいの？」

「大丈夫だ、チケットの件なら気にするな。ファンクラブ入ってる私なら安くなるしそのほうが：：」

「そうじゃなくて！ あの可愛い彼氏さんといかなくていいの？」

「ばっ！ 馬鹿！ 河野とはそういうのじゃなくて：：ただの趣味仲間というか何というか：：」

「いいっすねー、青春してて。私も彼氏欲しいなあー」

「だから違うって！」

「お、噂をすれば…」

「ちーちゃん！ おはよー！ あ、皆さんもおはようございます！」

「うんうん、朝から元氣いいね君は！」

「いやあ、やっぱかわいいっすね…羨ましい」

「それなあ」

「あれ、ちーちゃん、大丈夫？ なんか顔赤くない？ 体調悪いの？」

「わっ！ 馬鹿！ おでこをくつつけるな！ 恥ずかしいだろ！」

「えーでも、熱あるかもしれないし…心配だよ」

「大丈夫！ 大丈夫だから！」

3つ目は、こいつが私の中でただの友達じゃなくなつたことだ。

2ヶ月前のあの日以降、どんどん河野に惹かれていった。

…だが、恋愛小説をあんなに読んでるのに関わらず、こいつの鈍感さは筋金入りのようだった。

最近は私から積極的にデート紛いの遊びに誘うようになったのだが、全く気にしていない素振りで毎日が一進一退の繰り返しで感じていた。

だが、今はそれでもいい、そう思えるくらい今は充実していた。

「じゃ、私たちはこの辺で。部活の準備あるから」

「え？ そんなのありましたっけ？ 大体今ってテスト期か？」

「バカっ！ 空気読め！… あ、気にしないでそちらさん二人は仲良く登校してね！ ではなく！」

「行っちゃったね。じゃあお言葉に甘えて、仲良く登校しよっか、ちーちゃん」

「… ったくあいつら、余計な気を回しやがって… 私も同じ部活なんだから無理あるだろそれ…」

たくさんの友達がいて、河野がいて、私がいる。今はそれだけでいい、そう思えるくらい幸せな時間だった。

「… 部活入ったんだ、なんか意外」

「え？ あ、ああ、戦車道の部活にな。お前と同じように小説の影響で興味持つてな、私も人のこと言えんな、ははっ」

「ちーちゃん変わったよね、いい意味で。友達もたくさんできたみたいだし、表情も明るくなった気がする。… 俺、なんか嬉しいな」

「… ま、まあな。おまえのおかげで友達を作る恐怖心もなくなったんだ。感謝してるよ」

「そっか… なら、俺も安心かな！」

河野の表情が一瞬暗くなり、長い沈黙が包む。

そのとき、私は全てを察した。

「河野…… 転校するの……？」

「…… あつはは！ そうなんだよ、急に引つ越し決まっちゃつてき、いつ言おうかって迷つてたんだよね！ いやあ、流石ちーちゃん、俺のことならお見通しだね」

精一杯に明るく振る舞おうとしている河野だが、その笑顔はいつもと違いぎこちなかった。

「河野」

「親も急だよなあ、先週急に、引つ越すぞつて言われてさ…… ところの準備も…… できてなくて…… ほんと…… こまっちゃう……」

尻すぼみになる言葉とは反比例して、河野の目には涙が溢れていた。その瞬間、私は気がついたら河野のことを思い切り抱きしめていた。

「いいんだよ、今は。『別涙喜会』だろ。今は辛かったら思いっきり泣けばいい」

「ごめん…… ね……。ちーちゃんが不安がっちゃうつて…… 思つて…… 泣かない…… つもりだったのに……」

しばらく抱きしめたまま落ち着くのを待つと、河野から消え入るような声が上がつた。

「…… 俺、ちーちゃんの…… 最高の友達に…… なれたかな」

「ああ、間違いなくお前は最高の友達だ。お前のおかげで人生が変わった、生き方が変わった。どんなに離れてても私はお前のことは忘れないよ」

「… そっ… か。なら… きつとまた会えるよね」

「ああ、会える。私さ、小説の影響で入った部活だけど、今はすっごいそれが楽しいんだ。高校も大学もきつと戦車道を続けれると思う。… 私決めたんだ。河野に見つけてもらえぬくらい戦車道で有名になるって！」

「ふふっ。じゃあ次会うときはきつと有名人だね」

「おうよ、バリバリサイン書いてやるから、色紙の準備しとけよー！」

「うん！ 楽しみにしてるよー！」

これが、中学時代の私と、河野の最後の会話だった。

6年後

あいつが引越した後、宣言通り私は戦車道の道へまっすぐに進んだ。高校では中学の経験を生かしアンツィオ高校に推薦で入り3年で隊長を任せられるまで成長した。

そして、今、私は大学2年生にして実力を買われアンツィオ大学の戦車道チームのチーム長を任せてもらっている。

「… あいつ今頃どこで何してんだらうな。いや、いかんいかん、今日は大事な練習試合だった… 安齋、邪念は捨てろー！」

頬をペチペチと叩き、会場へ急いだ。

「えつと……今日の練習試合は大洗大学とか……会場はええと……」

「……ここから大学までは歩いて15分くらいなんだ！ 着いたら寒いだろうから部屋に案内するね！」

「いやいや！ 悪いですよ！ 部外者ですし……」

「いーよいーよ！ 河野さんには特等席用意してあげるね！」

「ちっ……カップルが朝からイチャイチャして……。朝玄関から一緒に登校とか少女漫画かっつての……ってお前っ！ か、河野か!?!」

思わず大声を出してしまい、驚いて二人が振り向く。

「……もしかして……ちーちゃん？」

安齋千代美は中学の幼馴染と再会を果たすのであった

第12話 盤外戦術

「うわあ！ ちーちゃんだ！ 久しぶり！ ずいぶん雰囲気変わった…」ガシッ

「説明しろ…」

茫然とこちらを眺めていると思うと、急に近づいてきて肩を掴んだちーちゃんもとい
安齋千代美は目をぐるぐるとさせながら俺を激しく揺さぶってきた。

「いいからこの状況を説明しろ！ なんでお前が西住の家から出てきたんだ！ ああ
あ、あいつとまさか付き合っているとかいいうんじゃないだろうな！」

「ちよ！ やめ！ に、西住さん！ こめん！ ちーちゃんに状況の説明を…」ガシッ

「ちーちゃんって何!? アンチヨビさんどういう関係なの!? ねえ！ 後敬語やめて
！」

「ちよつと！ 西住さんまでどうしたの!?! やめて！ 吐く！ 朝食全部吐いちゃうから
!!」

今にも襲いかかってきそうな目をして二人をなんとか振り解き、近くの公園で西
住さんにちーちゃんとの過去のこと、ちーちゃんにこの状況の説明を軽くした。

それを聞いてひとまずは納得したのか、落ち着きを取り戻したのだが…

「… 幼馴染だったんだ… しかも名前呼び…」

「… 襲われている西住を助けて一晚を共に… 同じ屋根の下…」

と、ずっとこんな様子で、ブツブツとうわ言を言いながら考え事をしていた。

何をいつてるのかは正直よくわからないが、なんとなく気まずい空気が流れる。

しばらくして、どこからか携帯の着信音が鳴った。

「あ、に、西住さん。携帯なってるよ！」

「へ？ あ、やば！ 先輩だ！… もしもし！… え？ 今会場向かってる途中ですけ

ど… え!? 車長会議って今日やるんですたっけ!? ごめんなさい!… はい!すぐ

向かいます！」ピッ

「お、おい西住、今の電話って」

「ごめんなさい! ちよつと先きます! あ!河野君! 今日活躍見ててね!

かっこいいところ見せちゃうから! あ、アンチヨビさん、すみませんが河野君に道案内

お願いします! じゃ!」

「あ、おい!… ってもういないし… 忙しいやつだなまったく…」

—————

「… 大丈夫かな、西住さん。間に合うといいけど」

「まあ、ここから会場まではそこまで距離はないし、なんとかなるだろ。あいつ意外と足

も速いしな」

「そかそか、じゃあ心配いらなそうだね」

嵐のように過ぎ去っていった西住を横目に、わたくし安齋千代美は内心めちやくちやに焦っていた。

（西住がいない… ということは二人きり!? これつてもしかしてチャンスなのか？

幼馴染のアドバンテージを活かすなら今しか…！）

「いやー、それにしても久しぶりだね… あれ、よく見たらちーちゃん随分雰囲気変わったね！ メガネじゃないし、髪型もさっぱりしたね」

「そ、そうか？ メガネは戦車道やる時に邪魔だったから…。お前こそ、久々に会ったら随分と…」

話題につられて、自分も河野の体に視線が移った。なんとというか目のやり場に困るとはこのことで、中学の頃とは比べものにならないほど河野は全体的に成長していた。

よく見るとそのようなプロポーションにも関わらず服装は信じられないくらいラフで余計に視線が外せない。

「… ちーちゃん？ どしたの、急に黙って」ヒョイ

「えっ!! いや！ みてない！ 何も見てないからほんと！」

「え？ な、何の話?… 見てないって何?」

おそらく何も考えてないであろう河野が唐突に私の顔に近づく。ほのかに香るシャンプールの匂いに思わず反射的に後退りしてしまった。

「あ、いやその、なんでもない！ 久々に会えて嬉しすぎて混乱しちゃってな！」
（やば、こいつからめっちゃいい匂いする。だめだ思考が回らん…）」

「……………」

黙り込む河野。神妙な顔をしてなにか悩んでる様子だった。

そんな姿もまた可愛らし… じゃない、とにかく弁明を…。

そう思った最中、河野が嬉しそうに話し始めた。

「そっか!! いやあ照れちゃうなあ。再会にそんなに喜んでもらえるなんてこっちまで嬉しくなっちゃうよー」

そうだった。こいつはそういう奴だった。

—————試合会場

「ついで、ここが入り口だ。河野は一般客だろうからこの先の観客席で待つてるといい。飲み物とか食べ物も試合前でも屋台がそこら中で出てるからそこで買え」

「へー、屋台なんて出てるんだ!… え、というか試合つてそんなに長いのか?」

「長いぞ、今日は練習試合だからそこまでだが、大きな大会になると半日以上なんてザラだ… というかお前、さては戦車道の大会見たことないな?」

「えへへ… 実はそうなんだ。ちーちゃんとか西住さんいなかったら会場すら怪しいレベルでして…」

「ったく… しよーがないな。ほれ、携帯かせ」

「え?… うん」

「友達登録して… っとこれでよし。ほれ、返すからこれ。新しいメッセージ来てるだろ」

「TIYOMI ってやつ? きてるきてる!」

「戦車道についてわからないこととか相談あったら気軽に連絡していいぞ… これでも選手の端くれだからな」

「わあ、ありがとう! 心強いよ!」

「ふふっ… 連絡先も交換しつつ、次の接点も作っていく… 我ながら完璧な作戦。これで西住から一歩リードを…」ピロリン

「… あ、西住さんからも連絡きた」

「なっ! お前、西住といつの間に連絡先交換したんだ! 一昨日の飲み会で初めて会ったって言ってなかったか!」

「え?… あー、今日の朝に交換したんだ。試合中はひとりになっっちゃうかもだからって… あ、『今夜暇だったら、夕食一緒に食べない?』って来てる! ちーちゃん

も…… ってなんで携帯とるの?」

「…… 私が返信する!」

「え、あ、うんいいけど……。変なこと言わないでね」

——大洗選手控え室

ピロリン

「あ、河野さんから連絡きた!」

『悪いが今日は私と夕飯食べる予定だから』ピロリン

『写真』

送られてきた写真は満面の笑みを浮かべたアンチョビさんに抱き寄せられる形でフレームに収まる困惑した河野君とのツーショットの写真だった。

「なっ……。何して……。! アンチョビさんめー!」カチカチ

『何してるんですか!』 河野君に変わってください!』

『それはできないな! 我々は敵同士、河野と飯を食いたくば、今日の試合勝ってから誘え。私が勝ったら予定通り夕食は私と「二人きりで」食べる。これは決定事項な』

『なんですか急に! そんな要求飲めるわけじゃないじゃないですか! 大体、私が最初にお誘いしたんですよ!』

『お? 怖いのか? へーい、西住流がびびってるー!』

「ぐぬ… ぐうー！」カチカチカチツ

「さつきから車長、携帯睨みつけて何やってるんだろう… あんな怖い顔見たことないよ…」

「すごい勢いで誰かと連絡とってるみたいだけど…」

「あ、あの車長… そろそろ準備の方を…」

バンツ

「みんな！ 今日には絶対勝つよ！！ アンチヨビさん！… じゃなかった、アンツイオ大
学！ 完膚なきまでに叩き潰す！！」

「…はいい！」

（なんか今日の車長、しほコーチみたいだよお！）

————会場近く

クシユン

「… 風邪でも引いたかしら」

つづく

第13話 英国淑女

「……これでよし……。ほれ携帯返すぞ、河野」

「ちよつ、これ大丈夫なの？」

「平気平気！お互い勝利の報酬がある方が燃えるつてもんよ！」

「報酬つて……。ただ俺とご飯食べに行くだけじゃん……。あ！もしかして！」

「いや！べ、別に下心とかあるわけじゃ……」

「夕食代！俺に奢らせようとしてるでしょ!? 今月ピンチなのに勘弁だよ!」

「……。まあ、期待はしてなかったけどここまでずれた反応されるとなあ……」

「ガマロザイフを開き、残金を確認しているとちーちゃんは何故か肩をガツクリと落とし、ため息をついていた。

「いいか！ 2人きりで食事つてのはなあ！ 特別な間柄の……」

「<アンツイオ大学の皆様、まもなく試合前合同ミーティングに入ります。まだお集まりでない選手の皆様は至急控え室の方へ……」

「あ、呼ばれてるみたいだよ」

「ぐ……。タイミングのわるい……。と、とにかくだ！河野！ 今日私のカッコいい姿と

「私と何を食いたいか！これだけ考えて観戦してろ！いいな！」

「はいはい、頑張つてねー」

控え室に走り去つたたちーちゃんを見送り、先ほど聞いた観戦場へ向かう。観戦場に着くとまだ人はまばらだった。

前の方の席を陣取り、ベンチに座つて大きな会場をぼーつと眺めていた。

（まあ、まだ朝だしな。とりあえず席は大丈夫そうだし、屋台でも見てこうかな。あ、でもまだ準備中かなあ…）

「お隣よろしいかしら」

「えっ、あ、はい。どうぞ」

突然話しかけられてびっくりして振り返ると、赤いジャケットをきた、金髪で青い瞳の女性が立っていた。

「ごめんあそばせ」と現代離れたお嬢様言葉？を使った彼女はなぜか閑散とした観客席で自分の隣に座ってきた。

「…あなた、お名前はなんていうの？」

「えっ？…えっと、河野です…。河野ひろです」

（なんか近いなこの人…）

「ひろさんですか。美しいお名前ですこと…。」

「あ、ありがとうございます…。ところであなたは…」

「ふふつ、名乗るほどのものでも無いですわ。強いて言えば美しい花に誘われた蜂、とでも言っておきましょうか」ギユツ

「は、はあ…。そう、ですか」スツ

よくわからないことを言いながら、ナチュラルに手を握ってきた謎の女性の手を軽く払い除ける。やばい、この人、マジで苦手なタイプかもしれない。

「ふふつ奥手なところも可愛らしいわ…。今日はお一人で？」

「え、えつと…。まあ、一人…。ですけど」

「あら！ それは寂しい！ それなら私と一緒に見ませんか？ 専用の席でおいしい

紅茶をご馳走いたしますわ」ギユツ

「ちよ、どこに！ まだ一緒に見るなんて…」

（な、なんだこの力！ 全然抵抗できない！）

「安心なさつて、こう見えてわたくし戦車道と紅茶の知識には自信がありますの。きつとあなたも楽しめますわ」

座つていた席からグツと腕を引つ張られ、無理やり連れて行かれそうになる。抵抗しようにも、自分が非力なのか全然振り解けず、なすがままに引つ張られそうになった時、後ろから声がした。

「おい、河野に何をしている」

「ま、まほさん！」

「… あら、西住まほさん。お久しぶりですわ。… 悪いんですが今取り込み中なの。邪魔しないてくださいます？」

「だつたらその子から手を離せ、これは警告だ。二度目は無いぞ」

普段から凜とした表情をした彼女にさらに凄みがかかり、金髪の女性を睨みつける。少し怯んだのか掴んだ手が離れる。

少しの静寂の後、再び元の表情に戻って話始める。

「… ふーん。そういうことですか。流石西住流、こういうところも手が早いんですね」

「どう思われようと構わんが… お前こそずいぶん手癖が悪くなったな… 聖グロリアーナ女学院2番隊長、ダージリン。最近の言動を鑑みると、ここには来ないと思っていたのだがな」

「あら、ずいぶんわたくしにお詳しいんですね。わたくし不要な練習は省いて効率化する主義にしましたの。美しい男性方に会う時間はいくらあっても足りないですから」

「… だから他校の練習試合に来てまで男漁りか？ ずいぶん高尚な時間の使い方をするようになったな」

「へえ、いうじやありませんか」

自分を挟んで睨み合いを続けている二人にの後方からまたしても誰かの声。

「あー！ いたいた！ もう！ またダージリン様はこんなところでほつつき歩いて！
行きますよ！ 皆さん心配してます、よー」

ダージリンさんよりも小柄に見えるその女性はすごい剣幕で彼女の首ねっこを掴み、
手慣れた動きでズルズル運ぶ。

「あ、ペコ… ちよつとお待ちに。まだ話は… ヒ、ヒロさん！ ポケットに連絡先を入
れておきましたの！ あなたからのご連絡待ってますわねー！」

「げっ… ほんとだ。いつの間に…」

「ちよつと！ダージリン様うるさいです！… そのの方々！すみません!! お手数お
けしました!! すみません!!」

引つ張られていったダージリンさんを眺め、嵐が過ぎ去ったことを悟った俺は思わず
尻餅をついてしまった。

まほさんは「大丈夫か」と手をひいてくれた上、持っていた飲み物を一つ自分に渡し
落ち着くまで待っていてくれた。

「す、すみません。飲み物までいただきちゃって…」

「気にするな。元々それはお前に買ってきたやつだからな。それより落ち着いたか

?… すまなかつたな、怖かつただろう」

「ま、まほさんが謝ることじゃ無いです！ それに俺もちゃんと断らなかつたのも悪いと思つてますし…」

「あいつも悪い奴じゃ無いんだが… 少々欲望に忠実すぎる部分が大学では目立つてな…」

「あ… 確かにそんな感じですねえ… あ、そういえばどうしてここにまほさんが？ 今日観戦するつもりだったら朝一緒に行けば…」

「あー、いや、私も別の会場の視察に行く予定だったのだがな、友人になぜか今日の試合どうしても見に来て欲しいとせがまれてな…」

「まもなく、選手入場です。本日の試合は大洗大学対アンツイオ大学です。ルールは戦車道公式大会に基づいた殲滅戦、制限時間は…」

「あ！ 始まりましたね！ うわー！ 楽しみー！」

「なぜだろう… どうも嫌な予感がする…」

―会場某所

「会長、西住まほさん、来てます… 隣には… 誰でしょうか？ 見慣れない男性がいます」

「あーほんとだねえ、誰だあのかわい子ちゃん、彼氏とか？ … まつ、いいいいよ。」

その方が面白そうだし」

「：：かしこまりました。では計画通りに」

「にっししっ！ さーて！ 西住まほ！ 練習試合、盛り上げてくれー！」

つづく

第14話 練習試合

へまもなく、選手入場です。ルールは戦車道公式大会に基づいた殲滅戦、制限時間は：

「あ！ 始まりましたね！ うわー！ 楽しみー！」

「ふむ… 今日殲滅戦…？ 練習試合にしては珍しいな…」

「せんめつせん… ってどんな試合ですか？」

「殲滅戦は敵戦車の全撃破が勝利条件の試合だな。練習試合では通常、フラッグ戦と呼ばれる別のルールが… 河野… もしかして試合は初めてか？」

「… すみません。実は試合どころか戦車道の知識もあんまりなくて… 勉強してからくるべきでしたね」

「… そうか。だが、最初はみんなそんなもんだ、気にすることもない… それに今日は私が横にいる。試合中わからないことはなんでも気軽にきけ。実戦で得る知識に勝るものはないからな」ポンポンツ

「はい！ ありがとうございます！」

ジーツ

「ちよっ！ あの二人本当にどういう関係!? 頭ポンポンしちやって！ ひろさんも満

更じやなさそうですし…。おのれ西住流めえ…。」バキイツ

「ダージリン様、スコーン握り潰さないでくれますか？ 床が汚れます…。その望遠鏡も覗き見用じやないんですけど」

「あー！ 飲み物の交換っこしてますわー！ 不潔！ 不潔ですわー！」

「はあ…。」

『さー！ はじまりました！！ 今回私、戦車道連盟所属！ 角谷杏が司会を務めさせていただきますーす！ 会場のみんなー！ 盛り上がってるかーい！』

「「「いええええい！！」」」

爆音と共に流れる軽快な音楽と共に現れたツインテールの女の子がバラエティー番組顔負けのマイクパフォーマンスを繰り返している。司会者の掛け声と共に、周りの観客は歓声をあげ、大盛り上がりだった。

「あ、あれなんですか？」

「ああ…。正直私もよくわかってない。戦車道連盟の若い衆が盛り上げるためにやっている催し…。らしい。選手だけでなく、来てもらった観客にも盛り上がりしてもらおうのが目的らしいが…。」

『さーで始まる前に！ 本日のスペシャルゲストのごしようかーい！ 一人目はこの人でーす！』デーンツ

「あ、あれ、まほさん。あれ俺たち写ってませんか？」

「角谷め……。今日の試合をやけに押しにくると思っただらこういうことか……」

観客席に複数ある大きなモニターは俺たちの姿をはつきりと映し出し、会場がどよめく。その横では頭を手をついてため息を溢すまほさんの姿が見えた。

「お、お姉ちゃん!？」

「西住い! 貴様! 抜け駆けかー!!」

『西住家当主! 西住まほ!! その横には可愛らしい彼女らしき姿も! これは西住流の大スキャンダルといったところかあ!? 現場の柚子さん! マイク渡しちゃって!』

選手サイドから飛ぶ野次の中、ポニーテールの女性がこちらに近づきまほさんにマイクを渡す。

「はーい! では! 西住まほさん! 対戦相手に何か一言お願いします!」

「対戦相手……? 私は今日は観客として……」

『はーい! と言うことで! 本日の試合内容を発表しまーす!』

『プロ候補チーム VS 大学チーム』

大きな電子掲示板に映し出されたタイトルとともに、プロ候補と銘打たれた選手の名前がずらりと並んでいる。その中には『西住まほ』の名がデカデカと赤文字で書かれている。

『はい！』と言うわけで本日は大洗VSアンツイオ戦を急遽変更しまして！西住まほ率いるプロ候補選手VS大洗・アンツイオ大学の試合をお送りしまーす！じゃあルールを説明するよー』

先ほどの掲示板に詳しいルールが映し出される。

①ルール 殲滅戦。プロ候補側は制限時間内、砲撃することはできない。通常選手側と同等の戦車を使う。

②勝利条件 大洗・アンツイオ側は制限時間以内にすべてのプロ候補を倒し切る。プロ候補側は1両でも生き残れば勝利となる

③スペシャルポイント 現状、最も実力の高い選手である『西住まほ』を倒した車両に関しては、個人賞として景品を贈呈

尚、それ以外のルールに関しては戦車道連盟の公式ルールに則り：・

「プロ候補の選手と戦えるのか！ すっげえ！」

「要は鬼ごっこってこと？ それなら私たちも勝てるかも！」

唐突に変えられた試合内容だが、練習試合ということもあり、選手たちもかなり乗り気の声が聞こえる。

「待て、そんな話は聞いていないし、私は参加するなんて言っていない。…私も暇じゃないんだ。通常の試合をしないなら私は帰らせて…。」

『へえー… なんだ。天下の西住流も結局そんなもんだねえ』

「… なんだと?」

『そんなカツコつけたって結局は負けるのが怖いんでしょ…。 あーあ、特別扱いまでして持ち上げてあげたのに飛んだ期待外れだなあ』

「…」

角谷さんがあからさまにまほさんを挑発する。

(まあ、でもこんな見え見えの挑発にあの冷静沈着なまほさんが乗るわけ…)

「いいだろう、西住流の力見せてやる。60分だろうと、6時間だろうと、西住流に敗北の文字はない!」

「「わあああああああ!!」」

『はーい!』 と言うことで本人も了承したと言うことで! 本日の試合スタートです

! みんな頑張つてねえ!』

「「うおおおおお!!」」

そんなこんなでまほさんは手際良く用意された選手に乗り、あつという間に特殊殲滅戦がスタートした。しかし、流石はプロ候補選手ということもあり、一方的な鬼ごっこ形式のこの試合でもほとんどの選手がかすり傷すらつけずに逃げ回っている。

「ぐう… あいつにいいところ見せたいのに… まほのやつ、流石に手強いな…」

「お姉ちゃん… やっぱり強いなあ… 作戦全部看破されちゃってるよ…」

プロ候補側の圧倒的有利な状況のまま、残り10分となったところで、なぜか俺の携帯に不在番号から着信が入る。

「はい、もしもし、河野ですけど…」

『あー、ごめん！ まほの彼氏くん？ 実況の角谷です。言い忘れてたんだけどさあ、

さっきのルールにあったスペシャルポイントの景品、特別食事会のペア参加チケットなんだー。デートの邪魔しちやったお詫びと言ってはなんだけど、君もこれ参加してよー！

「食事会？ え、えつとでも今日は先約が…」

マイクの音声をつければなしなのか、大音量で実況席から声が流れる。その様子に気づく様子もなく話し続ける様子に、会場だけでなく選手サイドもざわつく。

『そこをなんとか頼むよー、とびつきり豪華な料亭予約するからさ！ こんな機会ないと思うよー？』

『ちよ、会長！ マイク切り忘れてますよ！』

『え？ あつやべー！ じゃ、じゃあ！ さっきの件よろしくねー！ もう予約しちゃからー！ じゃねー！』

「あ、ちよつと…！… うーん、どーしよ。今日はちーちゃんかみほさんと食事の予定

が……」

携帯を見つめながら再度電話をかけようと悩んでいると、会場から爆音が響き渡った。

『こちら審判員！プロ候補車両が1両撃破されました！ 繰り返します！プロ候補車両一両撃破！ その他車両も複数台砲弾が命中中！』

モニターにプロ候補の車両が煙を上げる映像が広がる。その後も、かすりもしてなかった砲弾が的確に車両を撃ち抜いていく。先ほどまで余裕の動きだったプロ候補車両の隊列が大きく乱れていた。

「なんだ！ 何事だ！」

「こちらAチーム！ すみません！ 大洗の単体で乗り込んだ車両にやられました！」

「こちらDチーム！ 同じく単体で乗り込んだアンツイオにやられました！ こちらの動きを完全に読まれています！」

「……まさか…… あいつらか？」

『さー！ なんだかよくわかりませんが！今入った情報ですと、この数分でプロ候補車両は西住まほを除き全滅とのことです！ これはまさかの大学チームが勝ってしまうのか?! それとも、西住まほがプロ候補の意地を見せてくれるのか?!』

「とにかく一旦ジャングルへ向かうぞ！ 数的不利の解消を…」

「西住まほおお！」

「見つけたよ！ お姉ちゃん！」

轟音とともに現れた2車両は、西住まほの車両を挟み込む形で停車し、退路を塞いだ。

「くっ…くっ…ここまでか…」

「砲撃!!」

ヒュー!!

『試合終了!! 勝者！ プロ候補選手チーム!!』

「なあー!?!」

「そんな… あとちよつとだったのに…」

あと一歩でというタイミングで、無情にも制限時間終了のホイッスルがなり、審判員がジャッジを下した。ギリギリまで追い詰めたみほさんの車両、ちーちゃんの車両から悔しそうな大きなため息が溢れた。

『はーい！ と言うことで！ 勝者！ プロ候補…』

「まった!! この試合、私たちの負けだ… 車両をよく見てみる」

そう言って映し出された映像には、白旗をあげるまほさんの車両が見えた。おそらくホイッスルと同時に砲弾が命中、大破したのだろう。

「戦車道公式ルールでは、制限時間終了と同時に車両撃破をした場合、車両撃破を優先して勝敗が決定する。…審判、再度ジャッジを」

「しっ…失礼しました！ 勝者！ 大学チーム!!」

「わああああー!!」

こうして、特殊ルールではあるものの、プロ候補相手に『大学生チーム』が大金星を上げる形で終了したため、のちにマスコミやメディアにも大きく取り上げられることとなった。

—————

「…あ、そう言えば会長。今日の個人賞のペアチケット、あれどうしたんですか？」

「あーそれねー。なんか映像残ってなかったらしくてさあ、めんどいから彼氏くんに全部あげてきちゃった。元々あの子にあげるのは確定だったし、あの子に決めて貰えばいいでしょ」

「流石、会長。今日も冴えていますね」

「まあねー…それに、その方が面白そうだしねえ…にしし」

—————

「ま、まほさん、どうしてあの二人、異様にテンション低いんでしょうか…皆目見当が…」

「：： 自分の胸に手を当ててよく考えてみることだな」

「二人とも食事会に行きたいって言うから、両方にチケットあげたのに：： あの場を丸く収める最善の：： って痛い！ ちよ！叩かないでよ！ちーちゃん！ みほさんも！
まほさん助けて！」

「：： これは先が思いやられるな、まったく：：」

結局その後も一週間ほど、二人は口を聞いてくれなかった。

第15話 運命の人

その男性に初めて会ったのは、大雨がさった後の土手の前だった。

「うーん…… やっぱないよ……。ここら辺で落とすかと思っただけだなあ……」

私は仲間たちと共に高校最後の思い出作りにその土手でパーベキューをしていたのだが、不運にもその最中、土砂降りが降り、逃げるように解散。

その後みほさんにももらった大切なキーホルダーを落としてしまっていたことに気がつき、現在、必死にベシヤベシヤの土手を駆け回っているところだ。

「うわー…… どーしよう…… 全然見つからないよ……。でもみんなに協力してもらうのも悪いし……」

「だ、大丈夫？…… 何か探してるみたいだけど」

大学生…… だろうか。小さめのリュックサックを背負った黒髪の男性が私に声をかけてきた。

「…… 実はキーホルダーここら辺に落としちゃって…… ボコって言うクマのやつで……」

「そりゃ大変だ！ 俺も探すよ！」

「あ、でも！ ほんとただの小さいおもちゃですし…… 助けていただくほどでも……」

「でも、君にとって大切なものなんだろう？…俺もほら、昔から大切にしているのあるからさ、気持ちはよくわかるよ…これだつて君から見たらただのおもちゃだろ？」

そう言つて、男性が首元からジャラリと取り出したのは駄菓子屋でよくあるおもちゃのブレスレットだった。

相当大切にしているのか、所々修繕した跡が見受けられるが、確かに私から見たらただの年季の入つたおもちゃだった。

「じゃ、手分けしてさがそ！どこらへんで落としかとかわかる？」
「えつと…じゃあ…お願いします」

結局、親切なその男性を断りきれず、手分けして探すことになった。しかし必死の捜索も虚しく、時間ばかりが過ぎていった。

夕方頃になり、あきらめかけていた最中、男性から歓声が上がった。

「あつたかも！もしかしてこれ？」

「これです！ありがとうございます!!…よかつたあ」

そう言つて男性の手に握られていたのは確かにみほさんからもらったボコのキーホルダーだった。土砂降りの影響でかなり遠くまで流されていたようで、バーベキューをしていた河原からはだいぶ離れた場所で発見された。

嬉しさのあまり、受け取つた瞬間しばらくキーホルダーを握りしめていた。

「：： うん、よかったよかった！　そこまで喜んでもらえたならこつちも捜し甲斐があったよ」

「本当にありがとうございます。きっとあなたがいなかったら見つかってませんでした：：。　なんとお礼を：：クシユン」

「ちよつ大丈夫？：：　あーよく見たら体濡れてるじゃん：：　ちよつとまってね：：　確か：：　あつたあつた、これ使いなよ」

「すみません：：　何から何まで：：：」

どうやら捜してる途中、草むらの水滴でずぶ濡れになってしまったらしい。渡してもらったタオルで頭をふく。

なんと情けないことか：：：。

「ほんとにありがとうございます。このタオルは洗って：：　ってあれ？　あの人どこに：：：」

「ごめーん！　ちよつと急用出来ちゃったからもういくねー！」

先ほどまで隣にいたはずの男性が気がつくど土手の上まで登って走り出していた。よほどの急用なのか

「ええ！？　あつ：：　ありがとうございますましたー！」

「いいってことよー！　じゃねー！」

「あつタオル：… ってもういないや：…」

嵐のようにすぎていったその男性は名前すら聞けないまま、置き土産を残してさつていってしまった。

ほのかに香るラベンダーの匂いにするタオルに顔を埋める。

「素敵な人だったなあ：… 連絡先聞いとけばよかった：…」

私完全に恋に落ちてしまった。

それから早一週間が経ったが、私は名前もわからない彼に完全に心を奪われていた。

「うわあ、このお肉めちやうまだねえ！ 流石叙●苑！」

「ほんとほんと！ じゃんじゃん頼んじゃおう！：… 梓、次のお肉何がいい？：… 梓？

聞いてる？！」

「へ？ あ、ごめん！：… 聞いてなかった：… えっと：… 飲み物は：…」

「違うよ！お肉だよー！ 飲み物はさつきオレンジジュースでいいって言ってたじゃん！」

「そうだよ！ せつかく打ち上げに高い焼肉屋来たのに全然食べてないし！ 私が全部

食べちゃうよ？！」

「ごめんごめん！ えっと：… じゃあ：…」

「：… 梓ちゃん、バーベキュー以降ずっとあんな調子だよ、なんかあつたのかな？」

「青春真つ只中の女が考えることと言ったら…：ねえ、紗希ちゃん？」

「…：間違いなく…：恋煩い」

「やっぱいい！ そうだよねえ！ お相手は誰かなあ？」

「だから違うって言ってるじゃんー！」

「やばあ！ 聞こえてたあ」

カランコロンツ イラツシヤマセー

「…：おいおい、ここランチでも結構高いところじゃ…：」

「いいじゃん、入学祝いたくさんもらったんだろ？ パーつと行こうよ」

「人の金なのに本当遠慮ないよなお前、全く誰に似たんだか…：」

「えへへっ。そこは兄譲りだねー。すみませーん！ 二人なんですけどー」

入って来た男性二人組に目がいく。すると友人たちがいつものように騒ぎ出した。

「うわ！ あの二人めっちゃ可愛くない？ 特に背の高い方めっちゃタイプなんだけどー！」

「…：スタイルいいなあ、モデルか何かかな？」

「絶対そうだよお！ あーあんな彼氏欲しいなあ」

「あい…：大学生かなあ、大人な感じだねー」

「ちよ、みんな！ 知らない人なんだからあんまりじろじろ見ちゃ…：つてあー!!」

思わず大声を出してしまい、周りの客がこちらを見る。それはあの二人組も例外ではなかった。

間違いない。こちらを見ている男性は先日助けてもらったあの人だ。周りが騒ぎ立てるのを振り払い、気がつくとい私は彼の前に立っていた。

(やった！ こんな奇跡があるなんて！ ありがとう神様……)

「あ、あの！」

「……誰こいつ。ナンパ？」

話しかけようとする、氷のように鋭い眼光で弟？であろう男性が睨みつけてくる。相当警戒しているようで明らかに敵意剥き出しだった。

「あ、えつと……私は……」

「あー！ 君！ もしかしてこの前の土手の子かな？」

「そ、そうです！ あの！ この前は本当にありがとうございました！ タオルまで貸していただいたいちやつて……」

「あータオル！ すっかり忘れてたよー！ 体調は大丈夫？」

「はい！ お陰様で風邪も引かずにすみました！」

「うんうん、それは何より」

「あ、あの！ それです……タオルを返したので連絡先とかを……」

（うわあ… 弟くんからの視線が痛い…）

「やっぱりナンパじゃねーか！」

「ち、違います！」

「ちよ、やめろつて。連絡先ね！ LINEでいい？」

「はい！ 私のIDがこれで…」

（よっしゃ！）

ムスツとしたままの弟くんを尻目に、私はついに念願の連絡先を交換することができた。追加されたIDには猫のアイコン。その下にはスタンプで「よろしくね」と送信されていた。

交換が終わると矢継ぎ早に弟くんが手を引っ張り彼を連れて行ってしまった。もう少し話したかったが目的は果たせたのでよしとしよう。

「… 珍しいね。交換するんだ」

「まあ、ちよつとね。俺も聞きたいことあるし…」

「大体、お兄ちゃんは警戒心がなさすぎるよ。この前だつて…」

「はいはい、すみませーん… あつ」

角を曲がる際には河野さんは手をヒラヒラと私にふつてくれた。

これはもしかしたら脈ありでは… と淡い期待を抱いてしまう。

スキップでも踏みたい気持ちを抑え、足早に席に戻る。

「ちよ！ あの人とどう言う関係なの!？」

「もしかして！ つ、付き合ってたりするの?」

「女子校なのにどこで知り合ったのさ!」

その後の打ち上げはまるで尋問のように質問攻めでまるで食事が進まなかった。だが私の気分はずつと有頂天だった。

「えへへえ。秘密……。早く連絡こないかあ」

だがこのLINE交換をきっかけに修羅の道を進むことになることを梓はまだ知る由もなかった。

第16話 相談（前編）

「うーん……困ったなあ……」

まほさんとの買い物を間近に控え、私、河野は非常に切羽詰まっていた。

この発端は1週間前、自分の携帯にまほさんから連絡がきたのが始まりだった。内容はみほさんの入学祝いを選んで欲しいというものだった。

『もちろん私も選んだんだ……。だがその……。どうも私のだけでは不安で……』

『……あー……。それで、俺にも良さそうな祝いの品を選んで欲しいと……』

『ああ、君のセンスで構わん……。私はどうもこう言った贈り物に疎くてな』

『でもそういうのはやっぱり本人に直接何が欲しいか聞いた方がいいんじゃないですかね？』

『そうしたいのは山々なんだが……。実はみほには内緒にしている……。さりげなく聞くにもボロを出してしまうのもいやでな……』

『あー、なるほど、それで……。ってなんで俺なんですか!? 俺だってみほさんが欲しいがってるものなんてわからないですよ!』

『……そこは問題ない。とにかくお前がみほに買ってあげたいって商品を選んでくれれば』

ばそれで十分なんだ。お前からって言えばきつと喜ぶだろうし。頼む。みほが喜ぶ顔が見たいんだ。一つ力を貸してくれ。」

『うーん。なんか釈然としませんが。わかりました』

『本当か！ ありがとう！ じゃあ日程だが来週の。』

結局、勢いに押しきられ、来週の日曜にまほさんと大洗のショッピングモールで買い物をする事となった。

(。．．まあ、みほさんには前に世話になったしな。お礼も兼ねて選んであげようかな)．．．と、ここまでは良かった。問題はその後だった。

ー翌日 大学構内 教室

「おはよう！ 河野くん！ 今日授業一緒だね！」

大学の教室で一限目の授業を待っていた自分の前に颯爽と現れたみほさん。

「よしっ」っと小声で言ってから、なぜか心底嬉しそうに自分の隣の座ってきた。

「あれ？ みほさん、この授業取ってましたっけ？ 前回はいなかったような。」

「あーそれは教師に行つて無理やりねじこ。．．．じゃなくて、部活で忙しくて出られないコマが何回かあつてね。多分前回の授業はそれが重なっちゃたんだと思うな。．．．河野君はこの授業、一人で取ってたんだ」

「そうですね。他の方はこの授業取ってないらしくて、みほさんがいるって知って安心しました。あつ…でも今後も部活でお休みする時ありますよね多分…」

「大丈夫！ 河野君がいるなら死んでもこの授業だけは出席するから！ こんな絶好の機会…じゃなかったこんな楽しい授業受けないともったいなさそうだしね！」

「は、はあ…」

（楽しいって…このコマ『戦車道入門 ルール編①』って授業なんだけど…。むしろなんで取ったんだこの人…）

戦車道家元の娘がこんな授業取ってるのをお母さんやまほさんが知ったら…と内心かなり困惑していたが、

「共に頑張ろうー」と目をキラキラさせながらバックから教科書やノートを取り出したみほさんには口が裂けても言えなかった。

『では、授業を始めます。まず戦車道の歴史についてです。起源は西ヨーロッパの…スクリーンに移す形の授業らしく、教室全体が暗くなり、モニターに映像が映し出された。ことはここで起こった。

ピロリン

まほ『おはよう、来週の買い物、昼飯もあつちで食べるから…』
携帯の通知音と共にまほさんからのラインの連絡がきた。

教室が暗いせいかやけに目立つその光を慌てて切り、携帯を隠す。

（ちよっ！ あの人俺がみほさんと大学一緒って知ってるのに！ タイミング考えてよ！）

教室が暗いせいかやけに目立つ携帯を慌ててサッと携帯を手に隠し、恐る恐るみほさんの方をみる。

カリカリと真剣にノートを取っており、こちらには気がついていないようだった。

（ふーっ、良かった。バレてはいないかな……。またまほさんから連絡来てもやだし通知きつとこ……）

ほっと胸を撫で下ろし、コソツとラインの通知欄に手を伸ばそうとした時、再び通知音が鳴った。

（もー！ まほさん！だからタイミング考え……。えっ？）

みほ『ずいぶんお姉ちゃん和仲良くなったね？』

静かに光るみほさんからのラインの連絡。

その後の授業は全く頭に入ってこなかった。

―食堂

「……ほんとすみません……。別に隠そうとかそういうつもりはなくて……」

「……別に怒ってないし……。どのみち、その日は練習あつて行けないから関係ないも

ん……」

「あー…… あっはは」

授業終わり、無言で食堂に連れて行かれ、アイスを奢らされた。

終始不機嫌そうに頬杖をつきながらそっぽを向くみほさんは気怠そうにアイスを頬張っていた。

「…… あのー…… そろそろ機嫌直してくれませんかね？」

結局、このままじゃ埒が明かないと思い、まほさんに事情を説明した。

思いの外落ち着いていたまほさんはみほさんに電話。

日を改め、3人で買い物に行くということでみほさんも納得し、事態は収束した。

「…… でもさー。 やっぱり一言くらい誘ってくれても良かったんじゃない？ 私ちよつと傷付いたなー」

「うっ…… それを言われると…… すみません。 いつか買い物とは別に埋め合わせしますから……」

「ふーん。 埋め合わせねえ……。 あっ…… じゃあさ、今度の買い物の時にお姉ちゃんから聞き出して欲しいことあるんだけど……。 それが分かったら今回の件はチャラでいいよ」

「聞き出して欲しいこと……？ 直接聞くんじゃないめなんですか？」

「それがねー… お姉ちゃん優しいから私が聞いてもなんでも嬉しいとしか答えてくれなくて…。だからさ！ さりげなく、今欲しいものとか、趣味とか、好きなもの聞き出して欲しいなあつて」

「え、えー… それは…」

「埋め合わせ」

「わかりました！ ぜひ！ 任せてください！」

かくして俺は妹にバレないように妹の入学祝いの買い物しつつ、姉にバレないように姉の欲しいものを聞き出さなければいけないというなんとも複雑な状況下に置かれてしまった。

この状況を打破するため、俺はある行動に出た。

—————

(どうしてこうなった…)

大洗女子高校3年、澤は困惑でいっぱい思いを胸に秘めながら駅前の噴水で待ち合わせ時間を待つ。

またまた遡ること3日前、私の携帯に河野さんから連絡があった。

—澤家自宅

『おはよう。もう起きてるかな？』既読

「かつ河野さんから!？」

休日の朝、ラインの通知を見た私はガバツとベットから起き上がる。

この前連絡先を交換した河野さんからの連絡、まさかあちらから来るとは…。

寝起きだったこともあり、寝ぼけて既読をつけてしまった私は無難に返信をする

『起きてますよー! どうしました?』

『あーよかった! 実は、ちよつと相談したいことがあつて… 今日つて時間ある?』

できたらでいいんだけど、カフェなんかでお話ししたいんだけど… 時間なかつたら

全然!』

「休日… 相談… カフェでお話… これつて…」

携帯を持つ手が震え、心臓がバクバクと鼓動する。比喻表現なしでまさに私の胸は大
きく高鳴っている。

『今日は1日空いてます! 是非!』

『やった! じゃあ、駅前のタ●ーズに13時で!』

期待していいんだろうか、いや期待しちゃうよこれは。休日に二人きりでカフェ!

これつてデートつてことでいいんだよね!

携帯を胸に引き込み小さくガッツポーズ。私は急いで出来るだけオシャレな服に着
替えた。

ー13時 タ●ーズ

「…… えっ？ みほさん…… ですか？…… まあ、高校の先輩ですし知り合いですけど……」

「ほんと!? よかったー! ラインのトップ画にみほさんっぽい子うつってたからもしかしてって思ったんだけど! いやあすごい偶然だねえ!」

昂った私の気持ちに冷水をぶちまけるがごとく、会って早々、河野さんの口からは別の女の人の名前が飛び出してきた。

良かった、と嬉しそうにする河野さんに、嫌な予感が全身を走る。

「あ…… もしかして相談って……」

「そう! ちょっとみほさんのこと知りたくて…… 協力してくれると嬉しいなって」

その言葉を聞いた瞬間、私のリア充ロードがガラスのように割れて崩れていくのを感じた。

第17話 相談（後編）

「そう！ ちょっとみほさんのこと知りたくて… 協力してくれると嬉しいなって」

「ぶっ！… けほっけほっ…」

「ちよっ!? 大丈夫!? どうしたの急にコーヒー吹き出して!」

唐突に河野さんの口から出た衝撃ワードに思わずむせる。

困惑した河野さんにハンカチを差し出されつつ、必死に冷静さを取り戻す。

「すっ… すみません。ちよっくとむせちゃって… えっとそれで… なんてしたっけ」

（どうか聞き間違いであつてくれ）

「いやだからね、みほさんのこと気になつてるんだ。実は今度プレゼント渡そうかと思つてるから、出来たらよく知つてる君と一緒に選んで欲しいなって…」

聞き間違いじゃなかったし、聞きたくもないことが追加されていた。

しかし私は諦めない。こういうことを聞いてくるんだ。好意はあれど、きつとまだ知り合つて間もないはず…。

まだ十二分に私にも勝機はある！ここはひとつ、鎌をかけるか。

「へ、へえ……河野さんってみほさんと仲よろしかったんですか？」

「うーん……1ヶ月くらい前に初めて会ったくらいで、まだそこまで……」

よし！ ビンゴ!!

これなら逆に私に有利まであるぞ！がんばれ私！

「あー！ そうなんですわね！ じゃあ無難なものでいいんじゃないですかね！ コップとか、タオルとか」

「うーん、俺もそれは考えたんだけど……。実は、みほさんの実家に泊まらせてもらう機会あつてね。めっちゃくちや立派な家住んでたんだよね……。だから、ただのプレゼントじゃきつと満足しないんじゃないかなつて……」

「あー、確かに。みほさんの実家西住流ですもんねえ……。じゃあもうそこ……。えっ!? 泊まりに行った!？」

思わず大声をあげてしまった私に、河野さんの方も最初はキョトンとしていたが、自分の発言に語弊があると察したのか、慌てて弁明をし出した。

「いやいや！ 違うよ!! 飲み会の後にちよつといろいろあつて泊まることになったただけで……。全然変なこととかはしてないよ！」

「……色々……ですか……」

「そつ、そうそう！ 色々だよ、色々……。あはは」

前言撤回。多分この勝負、絶望的な負け戦のようだ。

右に左に目が泳ぐ河野さん。これは明らかに『へんなこと』があつた様子だつた。

（くっ… みほさん… 見かけによらず、すごいアグレッシブだつたんですね…）

正直敗色濃厚の気配。だが、そんなに簡単に諦めきれない私は泥沼へと突き進んでいった。

「えつと… そう言えばどうして急にプレゼントなんか…」

「あ… 長くなるから省くけど紆余曲折あつて、お姉さんからみほさんの入学祝い頼まれてさ。『お前が選ぶのならなんでも喜ぶ』つとか言つてめちゃくちゃハードル上げてくるんだよね…。だからせめて趣味くらいはしりたいな…って… 巻き込んだりしてごめんね」

「あー、家族公認かあ…。こりやダメだなあ…」

「えっ？ 何？ なんかつた？」

完全なる敗北。私の素晴らしき青春の始まりかと思つていた初恋は、戦う前からすでに終わりを迎えるのであつた。

（せつかくの初恋だ。せめて最後まで見届けよう…。この人の幸せな姿、拝ませてもらう）

「… わかりました。協力します。絶対にみほさんが喜ぶようなプレゼント買いましょ

うー」

「ほんと!? ありがとう!! よかったあ」

(あつダメだ、かわい。既に揺らぎそう)

こうして、私はラブストーリーの主人公から、恋のキューピッド(?)にジヨブチェンジすることを決意するのだった。

ー翌日

(どうしてこうなった...))

大洗女子高校3年、澤は困惑でいっぱいの思いを胸に秘めながら駅前の噴水で待ち合わせ時間を待つ。

昨日まで思い人だった人が別の人と結ばれる協力をする。

ああ、私はきつと今この場ならどんな聖人君主でもなれる気がする。

そんなことを考えていると、息を切らせた河野さんが待ち合わせ場所に来る。

集合時間に少し遅れてきた河野さんは赤いパーカーにジーンズとかなりラフな格好だったが、それでも髪や身嗜みはしっかりと綺麗に整っており、隠しきれない美人オラが溢れ出ていた。

「いやあ、ちよつと走っちゃったから汗だくだよー...。まだ春先だけでもうちよい薄着でくれればよかったなー」

そうやって河野さんがパタパタとパーカーを引っ張るとほのかに香る香水の匂い。側から見たらデート前のカップルといったところか。

（きつと昨日までなら飛んで喜んだ状況なんだけどなあ）

複雑な心境を抱えたまま、ショッピングモールへ向かい、みほさんのプレゼント選びが始まった。

私のアドバイスを元に、2人でみほさんの好きそうなものをチョイスして候補を作っていく。服、家電、小物などなど。念のため色々な選択肢を考え、一番喜びそうなものを熟考し合った。

（ダメ、この人はみほさんのことを… 応援するって決めたんだから…）

キラキラと眩しい彼の姿に心奪われそうになる時夜の心を必死に抑え、私達は本命の場所へと向かった。

「ボコシヨップ？ こんなキャラクターいるんだ」

「はい、今までは好きそうって感じのチョイスでしたが、ここは本命です。正直こちらへんはみほさんのドストライクゾーンだと思いますよ」

「へー！ そうなんだ！ 確かに可愛いねえ。みほさんにこんな趣味あつたなんて意外だなあ」

「いやあ、好きとかもうボコマニアって感じなんで… あつ、もしかしたらもうほ

とんど持つてるか……」

「……これなら、みほさんも喜んでくれるかな……喜んで欲しいな」

彼にあつてから初めて見た心底嬉しそうな優しい笑顔に思わずドキツとする。私に向けてのものではないのはわかつていても、胸の高鳴りはしばらく止まらなかつた。

結局、ボコショップのぬいぐるみをプレゼントに決め購入した。

「今日はありがとね。ほんとに助かつたよ」

「い、いえ！ お役に立てて何よりです！ では私はこの辺で！」

これ以上この人のそばにいたらダメだ。そう感じた私が逃げるようにその場を離れようとする、腕をぎゅつと掴まれた。

「あつ、ちよつと待つて！ 今日付き合つてくれたお札に実はね……」

そう言つて河野さんがバックから取り出したのはボコの小さなストラップだった。

「もしよかつたらこれ、受け取つてくれないかな？ 君もボコ好きつて聞いたから」

「あ、ありがとうございます……大事にしますね」

「うんうん！ そうしてくれたまえ！ それにほら！ 私とおそろにしたんだ！ 当日も君が見守つてるつて思うと気が楽だし！」

「あつ……そ、そうですね……それはいい考えです……」

この人は悪くない。きっと何の悪気もなく、感謝のつもりでこれを渡しているのだらう。

だが、私にとってこのプレゼントは残酷以外の何物でもなかった。

「本当にありがとうね！ 当日絶対成功したって連絡するから！ 待っててね！」

「はい！ 頑張ってくださいね！」

嬉しそうに手を振る彼に笑顔を向けながらその場を離れる。

家につき、部屋のベットに横になり、小さくため息をついた私は気がついたら泣いていた。

意識していなかった、意識しなくなかった初恋の終わりにようやく向き合えた気がした。

—— 当日 夕方

泣き疲れて寝てしまった私は、休日を半分以上も無駄にした状態で目を覚ました。

「はっ！ か、河野さんからは…!？」

さっと携帯を開くが河野さんからの連絡はなかった。

まあ、まだ夕方だ。きつとうまく行ってデートを楽しんでいる最中に違いはない。そう心では思いながらもぬぐいきれない不安を抱えた私はフラフラと一人でショッピングモールに向かうのだった。

ー ショッピングモール

「はあ… 何やってるんだろ私…。相変わらず未練がましいよなあ…。」

一人でショッピングモールをブラブラし、河野さんと回った店をボーツと眺める。幻覚のように映る、河野さんの嬉しそうな表情やしぐさを思い出しながら、気がつく、終着点、ボコショッピングに足を運んでいた。

他のお店同様、なんの気もなしにストラップを眺めていると何故か店員から声をかけられた。

「あ、あのお…。もしかしてこの前もこのお店来てませんでした？ 可愛い男の子連れて…。」

「へっ？… え、ええまあ…。それがどうかしましたか？」

「あー！ よかった！ 実は君のお連れさん、今日も来てたんだけどさあ、店に落としものしててさ！ よかったら届けてくれないかな？」

そう言つて河野さんの落とし物を店員から渡された瞬間、携帯の通知がなる。

河野『ごめん』

そう一言だけ書かれたメッセージにいやな予感がした私はある場所に走り出した。

ー (河野視点)

二人と別れた河野。本日の彼はまさに最悪だった。

買い物の途中でプレスレットをなくす。

みほさん用のプレゼントを本人の前で出してしまい、慌てて自分のだと言ってしまう。

挙げ句の果てに帰りに連絡しようと携帯で澤さんに連絡した瞬間、充電が切れて、意味不明な文を送ってしまった。

「はあ… 今日散々だったな…。まほさん… 笑ってたけど絶対あれ気付いてたよなあ…。恥ずかしい…。せつかく選んでくれたのに…。プレゼント選び直しかなあ…。へっへっクシユン！」

泣きっ面に蜂。この最悪の状況に追い討ちをかけるように、本日は花粉が絶好調だった。

「あー…。ダメだ…。涙止まらない…。こりゃ朝の葉切れたかな…。この時期は涙腺が緩くて敵わんなあ」

途方に暮れながら河野は一人、土手から見える川の流れをブーツと眺めるのだった。

「はあ…。はあ…。河野さん！もしかして…」

杞憂であつてくれと願いながら、澤は初めて彼にあつた土手に走っていた。

何故かはわからない。だが、彼はきつとそこにいる、そんな気がした。

「あつ… あれつて…」

予感は的中。河野さんは一人。土手で座っていた。

私は斜面を急いで駆け下り、河野さんに近づく。

「もー！　なんでこんなところいるんですかー！　約束はどう…」

「へっ？　澤さん…？　なんでここに…」

精一杯明るく振る舞おう。そう思つて近づいた私だったが、彼の顔を見てとつさに言葉を失う。

腫れぼつた目蓋、充血した目。彼の様子を見て、失敗したことを悟つた。

「あー… いやあ…　へんなどこ見られちゃつたな…。ごめんね！　俺ひどい花粉症で…」

慌てて立ち上がったかと思うと、手で涙をぬぐいながら必死に強がる河野さん。

普段の朗らかな彼とは対照的に、必死に明るく振る舞おうとする彼の姿に私はかける言葉が見つからなかった。

「… 失敗しちゃつた。選んでくれたのに… 本当ごめん」

しばらくの静寂の後、河野さんから声が出る。

喉の奥から必死に絞り出したような弱い声だった。

「そんなこと… 河野さんの方こそ大丈夫ですか？」

「…大丈夫。俺こう見えて打たれ強いから！また1から始めることにするよ…
あーでもブレスレット落としちゃったのはショックだな…」

（また1から…か。きつとこの人には諦めるって選択肢はないんだろうな… だった
ら…）

「…そうですか。じゃあそんな河野さんに元気出るものみせてあげますよ！」

「へっ？ 元気出るもの…？」

ひよいと、河野さんの前に例のブレスレットを取り出す。

それを見た瞬間、表情が変わる。

「えっ…うそ!? これ…俺の…？」

駆け寄って受け取る彼の瞳は初めは困惑の色をしていたが、まじまじと見つめ自分のものだと分かるとギョツと大切そうに握りしめていた。

「まったく、河野さんのおつちよこちよいです。お店に落ちてたらしいですよ？ 大切なものならもつと…」

「ありがとうっ!!」

彼の腕が私の背中に回り、ほのやかな石鹸の香りが私を包む。

相当嬉しかったのかかなり強い力でしばらくは抱きしめられていた。

色々と言いたいこともあったが今はそんなことどうでも良くなった。

この人はみほさんのことが好き。

そしてきつとこれからも、その気持ちは変わらないかもしれない。

でも、私は諦めが悪い女だ。この人と同じように。

(負けませんよ。みほさん。：)

澤梓は恋のキューピットから再び、恋のライバルへとジョブチェンジするのだった。

第18話 島田家の救世主

「いやあ！ 大学ってすごい所ですね！ 通うの楽しみになってきました！」

「そっか、それはよかった……」

「この後（授業）お昼どこで食べますかね？ たまには食堂以外でも食べたいですよね」

「うーん…… そうだね……。でも俺も正直ここら辺あんまり詳しくなくて……」

「そうですか！ なら散策しましよ！ 奢りますよ♪」

「いやいや、先輩だし俺が出すよ……」

（なんでこの子ずっと俺に絡んで来るんだ……。てか横のみほさんからのどす黒いオラ感じてやばいんだけど……。なんかしちやったかな……）

現在、大洗大学はオープンキャンパスなる、高校生が大学を体験できる期間にある。

現在、この目の前で嬉しそうにはしゃいでいる澤梓もこの期間を利用して大学を訪れているのだが……

「みてみて…… また高校生の彼女きてるよ……」

「やっぱ彼女もちかあ……。あの子いいなあ、羨ましい……」

「年下好きって噂……。本当だったのか……」

オーブンキャンパスが始まって以降、何故かずっと俺にべったりついてくる彼女は授業はもちろん、食事、空きコマの暇つぶし、行き帰り……。

まさに四六時中くつついて離れなかった。

その様子を見た周りの大学生はものの数日で完全に彼女と勘違い。噂は噂を呼び気がつけば大学中で悪い意味で澤は有名人と化していた。

（まあ、大学に知り合いなんて俺以外ないだろうし……頼ってくれてるのかな……でも……）

バキツ「澤さん、ちよつと近くないかな？ 河野くん、困ってるんじゃないかな？」

（えっ…… シャーペンってあんなふうに折れるんだ……）

「えー、そうですか？ 普通ですよこれくらい」

「それに！ なんで私と河野くんの間に座るの!? 私も休んでた分、河野くんのノート見たいんだけど!」

「そんなの授業出でない先輩が悪いんじゃないですかー！ そつちこそ真面目に授業受けてる河野さんに邪魔してるんじゃないですかー？」

「なっ…… そんなこと…… そんなことないよね!」

「ま、待つて待つて。俺は大丈夫だから！ 二人とも落ち着いて!」

（うーん、二人とも仲が悪いってわけじゃなさそうなんだけど…… どうしてこうバチバ

チに：：）」

―昼休み

「さーて、先輩、今日は何食べますか！ たまには食堂以外でも食べたいですし：：ちよつと良さげなレストランとかどうです？」

「えつ：： お昼から？ うーん：： でも今月もお金あんまりないしなあ：：」

「大丈夫です！ ついてきてくれたら足りない分くらい出しますよ！」

「えつ：： でも：：」

「じゃあ、私は全額出すよ？ 河野くん、西住家御用達の美味しい和食屋さん行かない？」

「あー！ズルい！ 西住流の力使うなんて卑怯ですよ！」

相変わらずすぐにバチバチしだす二人に困惑しながら大学出口に向かうと、何故か付近で妙な人だかりができていた。

写真撮るもの、声援を送るもの、握手を求めるものなどから見るに、おそらく有名人であることは間違い無いようだ。

「うーん：： あれつてまたカチューシャさんでもきてるのかな？ だとしたら、できれば近づきたくないな：： また変な誤解招いたら嫌だし：：」

(※詳しくは6話参照)

「でもでも、確かK様って今、海外でロケ中って話、この前テレビでやってましたよ？」
「じゃあ、誰だろ？　うちみたいな田舎に来る有名人なんて戦車道関連の人で間違い無いと思うんだけど…」

「あつ…　もしかして…」

人だかりの中心にいたのはおそらく中学生くらいだろうか、サイドテールにボコのぬいぐるみを抱えた少女だった。周りの歓声にやや戸惑った様子の彼女は俺たちを見つけると嬉しそうに手を振って近づき始めた。

「ごめんね…　今日は用があつてここにきてるだけだから…　あつ！　いた！　みほさーん!!」

「あー！　愛里寿ちゃん!!　久しぶりー!」

どうやら知り合いのようで、愛里寿さん同様、みほさんも嬉しそうに手を取り合つて再開を喜んでいた。

「実はね！　ボコの新作のグッズが出てね！　みほさんのために取り寄せたかからどうしても見せたくつて…」

「うそー！　うれしい!!」

歓談をする二人は随分と仲良しのように、夢中で何かの話題を歓談している。

完全に取り残された俺は澤さんに耳打ちする。

「……ごめん、澤さん、この子って……」ヒソツ

「…… 島田愛里寿さんです。西住流と同じく、戦車道の名門、島田流の娘ですよ。まほさん同様、飛び級で大学チームに入るほどの実力者らしくて……プロ候補の噂を後を立たないです」

「こんな小さな子がまほさんと同格!? 名門で飛び級か……。いやあ……。そりやあれだけ人気も出るわけだ……」

いわゆる完全無欠で生まれながらの天才タイプの人間のこの少女。

いやはや、本当にいるんだな、こんな漫画みたいな人間が……。

「それでね! 今度一緒に……」

関心と興味から、じつとその娘を見ているとその視線に気がついた彼女はまるで口ポットののようにピタリと会話を止め、直立不動になった。

「あ、愛里寿ちゃん……。? 大丈夫? どうしたの急に固まっちゃって」

「…… み、みほさん……。その方ってもしかして……。男の子ですか?」

「その方って……。ああ、河野さんのことかな? そうだよ! 今年からうちの大学に入った子で……」

そう言っているみほさんの説明の途中、不安そうな顔をしながら自分に近づいていた彼女はそっと自分の手に触れてつぶやいた。

「…… なんてだろう……。この人は全然怖くない……」

「愛里寿ちゃん……。でしたっけ……。？ なんて手を……。もしかしてどこかで……」

「隊長ー！ こんなところにいたんですねー！」

「もうすぐ会議なんですよ！ 遅刻しないようにそろそろ移動しちやいませよ！」

自分の手を見つめたまま、何か考え事をしている彼女の後ろから、所属しているチームメイトだろうか？ 大学生っぽい女性3人組ががこちらに走ってきた。

だが、そんな声なんて耳に届いていないのか、じつと俺を見つめる彼女はゆっくりと話し出した。

「…… あなたのお名前は？」

「えつと……。河野ヒロです。この大学の1年生です……」

「河野……。ヒロさん……。不思議な人……。大学ではなにを学びに？ 大洗に入ったのだから戦車道関連よね？」

「ええまあ……。でも自分男つてこともあるんで色々とサポートとして……」

「なるほどね。確かに男の人には少し窮屈な場所かも……。じゃ、じゃあマネージャー的な感じなのかな？」

「あーまあ、確かにそういう立場なんですかね？」

「そっか……。…… 確かうちのチームにはマネージャーが不在だったような……。お母様

に掛け合ってみようかな。」

（なんか夢中になつてて全然話すのやめないなこの子。後ろの3人ほつといていいのかな？）

だがそんな河野の不安をよそに、後からきた3人組は全く別の話し合いをしていた。

「めつ、メグミ。今のみてる？」

「ええ、動画で撮影もしてるわ。これは。緊急事態かも。ルミ！家元に連絡を！」

「了解！動画の添付したいので今撮ってるやつを。」

——島田家 家元実家

「……ええ。ええ、わかった。動画も今確認してるわ。ありがとう。後はこちらに任せて頂戴」ピッ

『戦車道はどこで知ったの？ 男の人がこの大学入るなんて珍しいし！それに。』

『え、ええつと。実は漫画で。』

「河野ヒロ。もしかしたら島田家の救世主になりうるかもしれないね」

動画で嬉しそうに彼に話しかける娘の姿を動画で眺め、ため息をつく1人の母。島田家の悩みの種に降りた光の糸を見失わぬよう、彼女は次の行動に移るのだった。

第19話 男性恐怖症

「……相談がある？」

島田愛里寿という少女と出会ってから数日だろうか、島田家の家元であるという女性から連絡がきた。

俺に折り入って相談がある、とのことらしい。

人目を憚る話なのか、島田家の本家の豪華な屋敷に呼ばれた俺は、男子禁制と大きく書かれた居間に通された。

「えっと……それで、島田家の家元様が俺になんの相談ですか……？」

「数日前にあつた娘を覚えているかしら。あなたと接触したと聞いているのだけど」

「接触って……愛里寿さんのことですよね？」

「そう、相談は愛里寿……もとい私の娘の件です」

そう言つて、彼女はゆつくりと話し出した。

「愛里寿はその……男性恐怖症というものを患っております。一種の対人恐怖症ですね」

「……男性恐怖症？」

「まあ、簡単に言ってしまうえば、男性に対して異常なまでに恐怖を感じてしまう病気ですね」

島田さんが話すに、娘のその異常性に気がついたのつい半年前ほど。

大学に飛び級しプロ候補として闘う中で、何度か男性と接点を持つ機会があったらしいのだが…

男性に話しかけられる、もしくは接触する（握手やアイコンタクト）だけで、動悸、めまい、吐き気、貧血 e t c . . .

ひどい時にはその場で失神してしまほど、体に異常が現れた。

初めは体調不良などを疑ったが、男性から離れ、しばらくすると容態は安定する様子を見て、確信したらしい。

「…原因を考えればキリがありません。元々人見知りが激しい子でしたから。同性ならともかく、年齢の離れた異性の存在はきつと彼女にとっては恐怖の対象だったのかもしれない。…しかしそんな悩みを持っていたある日、その例に漏れる、特異な存在を見つけました。それがあなたです」

「お、俺が？」

「ええ、理由はわかりませんが、娘はあなたのことを男性であるのにも関わらず、恐怖の対象と認識していないようです。あなたも先ほどの話を聴いて違和感を感じたでしょ

？」

「：：確かにそんな感じはしませんでしたね。至って普通：：といふかなんといふか」
そう言われて思い返すと、確かに最初の方は少し顔が硬つていたような気もしたが：：。知り合いのように気さくに話しかけてくる彼女にはそんな異常性、ひと時も感じなかった。

「そこでご相談、というかお願いがあるのですが：：」

「は、はい！ なんてしよう」

「なんでもいいです。娘の男性恐怖症の原因：：。もしくは解決方法を見つげるために、積極的に娘とコミュニケーションをとって欲しいんです」

「え、えつとそれはつまり：： 仲良くなれど？」

「：： まあ、大枠で噛み砕けばそうですね。島田家はもちろん、大学チームや関係者にも話を通しておきます。解決はともかくとして、とにかく娘との接点を多く作って欲しいのです。お願いできますか？」

「：： うーん：：。目的はわかりましたけど：：。そんな大役こなせるかどうか：：」

「まあ、そんな深刻に考えないでください。男性に免疫がつくだけでもこちらでは願ったり叶ったりですので」

「：： わかりました！ 頑張ってみます！」

こうして、島田家の未来を背負った一大プロジェクトが幕をあげた。

(とは言ったものの：俺だつてそこまで女の子と接するの上手くないんだよな：：：： あんまり気乗りしないけど、とりあえずあいつに電話してみるか：：)

―某所 キャンプ場近く

とあるキャンプ場。深いチューリップハットをかぶった女性が、一人カンテレを弾きながら海に沈んでゆく太陽を眺めていた。

「ちよつとミカー！　またサボつてー！　片付け手伝つてよー！」

「そうだそうだ！」

「：：： ふふつ。今日も平和だね：：： っっておや？　この着信：：： はい、ミカだよ、どうしたの？」

『もしもし？　河野だけど：：： 今大丈夫？』

「：：： おやおや、これはお久しぶり。昔の女が恋しくなっちゃったかな？」

『語弊のある言い方はやめろ』

「ふふつ語弊なんてひどいな、一夜を共にした仲だろ？：：： で、どうしたの急に」

『はあ：：： 相変わらずだなお前は：：：。お前確か、大学で心理学専攻だったよな。ちよつと相談があつて』

「ええ、まあ。気まぐれで行つたりいかなかつたりだけど一応ね。それで相談つて？」

『実はさ、ちよつと訳あつて島田家の娘さん…愛里寿さんつていうんだけどさ、その子の男性恐怖症を治すのに協力しててさ、心理学専攻のお前ならなんかいいアドバイスしてくれないかなつて』

「愛里寿…」

『もしもし？ 聞こえてる？』

「… ああ、ごめんよ。ちよつと因果を感じていてね…しかし相変わらず人助けかい？ 君も変わらないようにで安心したよ」

『… 頼む。なんでもいいんだ。そういう精神状態の子の心を開くようなこう…いい方法つてないか？』

「別に私は心理学専攻なだけで専門家ではないんだけど…まあ、手助けになるようなアドバイスをひとつするとしたら、そういうった子に一番有効なコミュニケーションはシンプル。『相手を理解しようとする』こと。気持ちを汲み取る姿勢を見せることだね」

『気持ちを… 汲み取るねえ…』

「まあ、こんな曖昧なこと言つてもしようがないだろうから、具体的な行動をいくつか教えてあげるよ」

「頼むー！」

「…… とまあ、とりあえずはこの3つくらいかな？　これを意識するだけでもだいぶ変わると思うよ」

『…… なるほど。わかった！　ありがとう！』

「礼には及ばないよ。まあ、お礼は期待してるけどね」

『相変わらず減らず口を…… と言いたいところだが今回は本当に助かったからな。まあ、こつち遊びにきたら飯でも奢ってやるよ』

「ふふつ、相変わらず女性の誘い方が上手だね。感心しちゃうよ」

『は？　何いって……』

「ミカー!!　いい加減降りてこい!!　皿洗いぐらいしろ!!」

「おっと、長話しすぎたよ。ごめんね、そろそろ切るよ」

「おう、じゃあまたな！」

「うん…… じゃあ頑張つて…… 妹をよろしく頼むよ」

「へ？　最後の方が聞こえ……」ピッ

「はあ……。やれやれ……。本当に不思議な子だ」

風に当たりながら一人、ミカは複雑な心境だった。

たった一人の大事な妹の写ったその画面を、しばらくじつと見つめて物思いにふけるのだった。

第20話 味音痴のお嬢様

「えつと… 確かこの角を曲がったところに… あったあつた。あれが練習場かな」

ミカのアドバイスをしっかりと頭で叩き込んだ俺は早速だが愛里寿との接触機会を増やすべく、彼女がいつもいると言う練習場に足を運んだ。

最年少のプロ候補で島田家の当主。そんなメンバーがいるチームともあつてその練習場は豪華絢爛な設備だった。

(… 屋内プールに、トレーニングルーム、会議室… っつてグラウンドも複数あるじゃん… どこだよ…)

彼女の母親から、彼女は本拠地のグラウンドによくいる、と言う情報をもらったのだが…。

豪華なことともさることながら、複雑で広大な設備に完全に途方に暮れていた。

(参ったな… この広さじゃ歩いて探すのも…)

「あの一、何かお困りでしょうか？」

「えつ… あ、えつとちよつと諸事情で、愛里寿さんがよくいるグラウンドを探しています…」

「あー!! もしかして! 君が噂の河野くんかな? 話は聞いてるよー!」

「(噂: : ?) は、はい! 河野ヒロって言います!」

「やっぱりー! ふーん、こんな美人さんだったんだあ: : へえ: :」

おっとりとした口調で、赤みを帯びた茶色の髪型をした女性が、自分の周りをグルグルと吟味するように眺める。

そしてしばらく考え込んだ後、再び口を開いた。

「うん! 合格! どんな子が来るのか心配だったけど、あなたなら大丈夫そうね!」

「あ、え、えつとすみませんがどちら様でしょうか: : ?」

「あー! あつはは! ごめんね! 私メグミって言います! 愛里寿隊長のいるチームの副官やってるものです! これからよろしくね!」

「よ、よろしくお願いします: :」ギョツ

サツと出された手を掴むと、彼女は先ほどよりもっと嬉しそうに、力強く握手をした。

現在、愛里寿さんは練習場で舞台別練習の真っ只中ということで、その場所まで案内してくれた。

「B! 周りをよく見なさい!! 後ろがガラ空きだよ!」

「D! カバーに入るタイミングが甘い! そんなんじゃあつという間に走行不能だよ!」

「はい！ すみません!!」

練習場の近くまで来ると、彼女のチームだろうか、激しい叱咤と砲弾のけたたましい音が鳴り響く。

よほど厳しいコーチなのか、戦々恐々としながらキビキビと選手たちは動いている様子だった。

(うわあ… 練習キツそうだなあ… それに名門チームだけあってコーチも… つて… ん?)

練習場の中央、メガホンを片手に先ほどから叱咤を飛ばしていたのは、紛れも無い俺が探していた愛里寿さん本人だった。

「えっ…!? 指導してるのって愛里寿さんなの!?!」

「そうよー! どう? 隊長、情熱的でかっこいいでしょ? あの歳でも十分な実力が認められて、チームではどちらかと言うと指導する側に回る人が多いのよー。優秀で頼り甲斐があつて… 本当、素敵だわ…!」

フェンス越しに愛里寿さんをガン見している彼女の目はまるで獲物を見つめるライオンのようにギラギラしていた。

しかしその一方で顔の下半分は柔らかく綻び、口角がゆっくりと下がって行くのがわかった。

「え、ええ、まあ…」

「…はっ。いけない、いけない！ 隊長のあまりの魅力に作戦を忘れるところだったわ！」

「作戦？」

「いや！ こっちの話！ ごめんね！ ちよつと電話するからちよつと待つてね！」

サツと真面目な表情に切り替わったかと思うと、彼女は慌ただしく携帯を取り出し、何やら何処かに連絡をとっている様子だった。

彼女の連絡中、暇なので練習を眺めようと、目線に戻すと、休憩しているチームメイト達がこちらをチラチラと見ていることに気がついた。

（男が珍しいのかな？ まあ、隊長の愛里寿さんが男性恐怖症だもんな… そりや不審がるわ）

「はーい！ 皆さーん！ ここですー一旦休憩です！ 所定の場所で各自お昼を取ってくださいー！」

「はーい！」

時刻はちよつど12時を回ろうかと言うところで、先ほどまで電話をしていたメグミさんが戻ってきて、全体に号令をかける。

その声に呼应し、チームメイト達がキビキビと奥の建物へと向かっていった。

「さて！ 河野くんもついてきて！ ちょうどお昼ご飯みんな食べてるところだから、是非一緒に！」

「えっ、あー、でも俺お弁当とか持ってきてないし……」

「大丈夫！ とにかくついてきて！ 隊長にも会いたいでしょ！」

強引にグイグイと手をひかれ、彼女たちが休憩していると云う建物に連れていかれた。

メグミさんがドアを開けると、学校の食堂のような部屋が広がっており、先に入っていたメンバーは持ってきたであろう、お弁当を広げ、歓談していた。

「さっ！ 隊長はこの奥のミーティングルームで食事してるからー」ガチャ

中に入ると、ボコの人形をテーブルに置いた愛里寿さんが、ぼつんと座っていた。なぜか顔を赤くして俯いている彼女以外には人がいなかった。

「あ、ありがとうございます。あれ、他の方は……」

「あ……えーと、あー！ ごめんね！ 偶然！ ほんつと偶然！ 今日他メンバーで昼の会議しないといけなくて！ 悪いけど、隊長と二人で食べて！ お願い！」

「え、ええ。残念ですがわかりました……」

（会議……？ ここがその会議室じゃ……）

「じゃ、じゃあ！ 機材のチェック……じゃなかった、会議の資料の準備するから後はよ

ろしくね! じゃ!」

「あ、ちよつ!」

ボタンつと閉められたドア。相変わらず俯いたままの愛里寿さんと二人、沈黙の時間が流れる。

しばらくして、気まずさに耐えきれなくなった俺は話し始める。

「あ、え、えーと、じゃあ俺も座ろうかな。隣いいですか?」

「は! ひゃい! 大丈夫!...ど、どどどうぞ!」

「あ、ありがとうございます!」

椅子をスツと引いてくれた彼女の隣にちよこんと座る。

相変わらず俯いたままの彼女だったが、近くで見ると心なしか少し顔が赤い気がした。

しかし、先ほどと同様、ポジションが変わっただけで、相変わらずの沈黙。

彼女はチラリとこちらを見ては、目が合うと慌てて視線を逸らす。これの繰り返しが続くのだった。

(うーん... 大丈夫だと思っただけど、やっぱり男性恐怖症は俺も例外じゃないのかな? 明らかに様子おかしいし... お昼中に申し訳ないし今日は撤退するか...)

「え、えつと... 愛里寿さん? ごめんなさい、気になりますよね。俺は今日はこの辺

で……」

立ち上がり、そう言いかけた最中、袖をギュツと引つ張られ、今にも消え入りそうな声で、声を出した。

「あの!…… お弁当。多めに作っちゃったからあなたさえ良ければ……」

「えっ…… いいんですか?」

「…… どうぞ。あなたさえ良ければ……」

そう言つて机にコトリとおいたのは、先ほどからずっと握り締めていたお弁当箱だった。

蓋を開くと真つ赤なチキンライス?と赤みがかつたたくさんのおかずが入っていた。

(なんか全体的に赤いのが気になるけど…… 美味しそうだな)

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて…… いただきまーす!」

豪快にチキンライスをスプーンに乗つけて口に運ぶ。

パクリと一口食べた瞬間、口の中に大量のスパイスと香辛料の味が広がり、激痛が走る。

(な…… なんじゃこれ!! 辛い!! てか痛い!!)

チキンライスと思つていた部分はよく見ると唐辛子、一味、豆板醤など、とにかく辛けりやいい、みたいな調味料で真つ赤に染められた白米だった。

「……ど、どうかかな？ 私が辛党だから普段は辛口なんだけど……口に合わないといけないと思って今回は少し甘めにしたって……」

「へ、へえー…… そうなんだあ…… ちよ、ちよつと待つてね水を……」グツ

口の中に走る激痛と、止まらない汗、腹痛…… わずか一口食べただけでこのダメージだ。全部食べるには相当の……

（こんなの食べたら体が…… いやでもここで残したら…… 考えろ、考えるんだ……）
俯いた状態で脳をフル回転させるも、激痛で上手く思考が巡らない。

食べようにも、恐怖から手が全くと言っていいほど動かない。

「……あの、口に合わなかった…… ですよね…… ごめんなさい」

「い、いやー！ そんなことは……」

「ううん、いいんですよ。勝手に作っちゃっただけですから。あ、食堂行きましょうか……」

そう言つて、でスツと弁当箱に手を伸ばす愛里寿さんの手には無数の絆創膏が貼つてあつた。料理に慣れてない彼女が必死に作ったものなのだろう。

それに気がついた時、俺は自然と口から言葉が出ていた。

「ち、違います！ めっちゃ美味しくて味わつていたと言うか…… 是非残りも食べたいんですが！」

(つてどうすんだよ俺！ さつきから手が全く動かないのにそんなこと言っても！ もうしかたねえ！ こうなりや無理やり！)

「え、でも全然箸が進んでないし… 無理しなくても」

「いえ！ 本当です！… ただ… 食べる前にひとつお願いがあつて!! いいですか!!」

「へ!? は、はい！ なんでしよう!!」

「腰が抜けてしまったので、愛里寿さんが口に運んでくれませんか!!」

「… はい？」

—この選択肢、神の一手となりうるのか。それとも…

第20.5話 味音痴のお嬢様 裏

一時は少し遡り、河野が見学にくる日の朝

（おかしい……みんないつもよりも動きが鈍い……メグミとアズミもなぜか休憩に行つたまま帰つてこないし……）

愛里寿は今朝方から他の隊員の動きが気になっていた。

練習こそ集中している様子だが、休憩中になると皆が自分の顔をチラリと見てはヒソヒソと話をしているからだ。

（寝癖……？ それとも服装が……。いやおかしなところな何も……）

練習の指揮を取りながら、練習場のガラスをミラーがわりに自分の姿を凝視するが特に変な部分はないように見えるのだが……。

こんな違和感、このチームで隊長をやり始めてから初めての事だったので顔には出さずとも朝から終始困惑していた。

（初めてだ……こんな事……）

出会ったことのない違和感。その考えが浮かんた時無意識に連想したのは「あの人」の存在だった。

「河野ヒロ…」

男性という存在を避けていた私が初めて自分から話したいと思つた不思議な生物。握つた手は間違ひなく男性のもの。声だつて、顔だつて…。

だが自分でも怖いくらいにすんなりと彼を受け入れることができた。

(変な気持ち… 病気… なのかな… それとも…)

「… いちよう！ 隊長!!」

「へ!? な、何?」

「何じゃなくて! 基礎練習終わりましたので、次の指示をお願いしますよ!」

「ご、ごめん! えつと… 次は展開訓練! A, Bチームは所定の位置に!」

「「はい!」」

(ダメダメ! 隊長としてチームを引っ張らないと!)

パンツと頬を叩き、ゆっくりと指揮用のパイプ椅子に腰掛け、私は集中モードに切り替えるのだった。

————— 昼前

気が付くと昼休憩前の最後の練習に入っていた。

「B! 周りをよく見なさい!! 後ろがガラ空きだよ!」

「D! カバーに入るタイミングが甘い! そんなんじゃあつという間に走行不能だよ

！」

「はい！ すみません!!」

(みんな、着実に連携も取れてきてるね。。。これならあの西住流にも。。。)

真剣な眼差しで練習を眺めていると、ピコンツと一件、ラインで連絡がきた。

「。。。ん？ メグミから。。。？ そういえば休憩いったまま帰って。。。ってええっ?!」

『隊長！ お目当ての河野くんって男性が来ましたよ！ ほら！ マネージャー候補の！』

集中モードが一気に崩れ、思わずスマホを凝視する。

(か、河野くんってあの。。。？ ええっ?! 何でここに。。。?)

初めて会った日の夜、確かに家元にマネージャーの打診をしたが、性別はもちろん、何も彼のことは話していない。

偶然だろうか。。。それにしてはできすぎている気が。。。。

動揺して震える指を必死に抑え、メグミに返信する。

『ちよと！ あなた練習は？ というかマネージャー候補って』

『もー！ 細かい話はいいですから！ とにかく昼休憩にして、ミーティングルーム来てください！ 客人待たせちゃダメでしょー!』

「メ、メグミめ。。。後で説教ね。。。 全員集合!! これより昼休憩に入る! ル

ミ、後は任せたわよ」

「了解です♪ お気をつけてー」

隊員達に休憩を告げると、怪しまれないように急ぎ足でミーティングルームに向かう。

そこにつくと何故かお弁当箱を持ったアズミの姿があった。

「隊長！ 遅いですよー！ 早くしないと河野さん来ちゃいますよ？ あ、あとこれはいい、お弁当！」

ドアを開くと矢継ぎ早に弁当箱を手渡してきた。

唐突に渡されたことに戸惑いつつも、コトリと手に持っていたボコの人形を置くと、冷静に対応する。

「遅いつて… 私はメグミに呼ばれてきただけなんだけど…：…：… とうかなにこのお弁当。どう見ても二人分あるんだけど…：」

「何つて…： ふふっ」

質問責めする私にニヤニヤと嬉しそうに近付くと、耳元で呟く。

「…： 河野さんの分に決まってるじゃないですか」

「かわ…： つてへえ!? そんな急に渡されても困るんじゃー！」

「あー、中身ですか？ 大丈夫ですよ！ 隊長の味音痴も考慮して、今回は少し甘めに

作つたとの事ですし！」

「そ、そうじゃなくて！」

「…… さっ！ 客人がお見えです！ 隊長としてしつかりマネージヤたりうる存在か見極めてきてくださいねー！ それじゃ！」 パタンッ

嵐のように現れたアズミがいなくなった部屋にはポツンと取り残される。

だが、静かな部屋の空気とは裏腹に私の心拍数は今日一番に昂っていた。

（河野くんが来る…… 河野くんが来る……？ どどどーしよ！ と、とりあえず冷静になれ私！）

そうこうしている内に、入れ替わるようにアズミの声が近づいてきた。

「さっ！ 隊長は…… 食事してるから！」

「あ、ありがとうございます。あれ、他の方は……」

（ほんとにきた！ほんとに河野くんだ!!）

ドアが開き入ってきたメグミの後ろに申し訳なきさそうに入ってきたのは間違いない。河野くんだった。

だが、そうとわかっていても顔がどうしてもあげられない。妙な心理的圧迫が私を襲うのだった。

（またいつもの恐怖症……？ いやでも全然嫌な気分じゃないし……むしろ……）

普段も男性を前にすると似たような状態にはなる。

だが、今回ののは明らかに違う……というより気分的にはむしろ逆に高揚しているのを感じる。

嬉しい気持ち半分と何故か恥ずかしい気持ち半分……。

とにかく今まで経験したことのない複雑な感情が押し寄せてくる。

「あ、え、えーと、じゃあ俺も座ろうかなー。隣いいですか？」

「はー！ ひゃい！ 大丈夫！……ど、どどどうぞ！」

「あ、ありがとうございますー……」

頭の中がグチャグチャにかき回されている最中、唐突な彼の声に思わず動揺が言葉に出る。

ロボットののような動きで椅子をゆっくりと引く私に、明らかに引き気味に彼の苦笑いが胸に刺さる。

（今絶対変な人って思われた！ 変な人って思われたよお……）

たった一言ですら呂律が回らず羞恥心に打ちひしがれている今の私に、隊長としての威厳は皆無だった。

しかし、そんなことで挫けてはいけない。齢14歳にして若干涙目になりながら、彼と目線を合わせる努力を始めた。

チラリと見ては目が合うと目線を外す。

またチラリと見ては見られたら目線を外す……。

(いや無理！ どーしよ！ 私つてこんなコミュ障だったつけ!?!… と、とにかくこのもらったお弁当を渡さないと……)

お弁当を渡して、一緒に食事にさそう。

簡単な事だ。

なのに何故か体が動かない。

この前のように自然に動きたいのは山々なのだが、何故か自身の外見や彼の言動に異常に敏感になってしまう私がいるのがわかった。

髪型は変じやないか、服装は？ 汗臭くない？

この人に変だと思われたくない、その思いが強くなってしまふのが逆効果をうみ、余計挙動不審になる悪循環。

そんな私を氣遣ったのか、彼から一言、静かに声が上がる。

「え、えつと…… 愛里寿さん？ ごめんなさい、気になりますよね。俺は今日はこの辺で……」

(だめっ！ それだけは……！)

咄嗟に袖を引っ張り、彼を引き止める。自分でも驚きの反射神経で一気に距離が近づ

いた。

逃げられない状況になったことが幸いしたのか、私は初めて彼の顔を直視することができた。

「あの!... お弁当。多めに作っちゃったからあなたさえ良ければ...」

「えっ... いいんですか?」

「... どの、どうぞ。あなたさえ良ければ...」

(言えた!...! 言えた!)

ニコツと笑顔を見せた彼は嬉しそうに私のお弁当を受け取る。

気持ち悪いくらいにじわじわと口角が上がっていくのがわかった。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて... いただきまーす!」

しかし、渡せた余韻に浸っていたのも束の間、私のお弁当を食べた彼の顔色が変わっていく。

口に入れたスプーンがピクツと動いたかと思うと、そこから動きが固まる。

(あ、あれ... 甘口にしたって聞いたのに... もしかしていつのも私の味付けなんじゃ...)

昔から戦車道をはじめとする多くの習い事に触れてきた私は知らぬ内に卓越した動体視力や美的感覚、絶対音感などを身に付けていた。

だがそんな私にも唯一、人よりも劣っている感覚が存在する。それが：

―味覚

そう、私はどうしようもないほどの味音痴、そして馬鹿舌の持ち主なのだ。

特に好きな食べ物も顕著で、幼い頃から辛いものに目がなく、ほとんどの食べ物に香料や辛味を入れたものを好んで食していた。

最初こそ栄養バランスや健康面で周りや母上から止められはしたが、健康上なんの問題もないままそんな食事を恒常的に食していたせいも、感覚が麻痺したのだろう。誰にも止められる事はなくなった。

（そうだ、私のお弁当！、これとあれはきつと同じく母上が作ったものに違いはない、なら…）

パクリと一口自身の弁当を口に運ぶ。すると普段の数段は辛さを感じないほど、味付けが薄かった。

きつと人に渡すようだと理解してくれた母上が予め普通の辛さにしたのだろう。

ひとまずはほっと安堵し、言葉が漏れた。

「…ど、どうかな？ 私が辛党だから普段は辛口なんだけど…口に合わないといけないと思って今回は少し甘めにしたって…」

「へ、へえー… そうなんだあ… ちよ、ちよつと待つてね水を…」グツ

しかし、安堵したのも束の間、彼の表情は曇ったままだ。

いや待て、冷静に考えたらこの状況不味くないか？

あんなゲテモノみたいな見た目の弁当、味云々以前にそもそも男の人に渡すものじゃない……。

ヤバイ、そう考えると異様に恥ずかしくなっていた

「…あの、口に合わなかった…ですよね…ごめんなさい」

「い、いや！ そんなことは…」

「ううん、いいんですよ。勝手に作っちゃっただけですから…あ、食堂行きましょうか…」

とにかく自分の味音痴を公言しているようなこの弁当を河野さんから遠ざけたかった私は無理やりにも食堂に行く流れを作ろうとした。

しかし、そういつてグツと弁当箱を引っ張ろうとした際、河野くんは異常なほどに私の手に視線がいつていた。

(手につけた絆創膏を見てる…？ ってまさか…) グツ

「ち、違います！ めっちゃ美味しくて味わつていたと言うか…是非残りも食べたいんですが！」

間違いない。彼はこの弁当を自分が前日に一生懸命に作ったと思っている。

「え、でも全然箸が進んでないし…無理しなくても」

（違うの！これは昨日戦車整備で怪我してつけたやつだから！こんなゲテモノ作った私じゃないの！ 変な気使わないで!!）

「いえ！ 本当です！…ただ…食べる前にひとつお願いがあつて!! いいですか
!!」

「へ!?! は、はい！ なんででしょう!!」

「腰が抜けてしまったので、愛里寿さんが口に運んでくれませんか!!」

「…… はい？」

「この選択肢、神の一手となりうるのか。それとも…」

第21話　それがボコだから

「腰が抜けてしまったので、愛里寿さんが口に運んでくれませんか!!」

「……はい？」

辛さで限界の自分が出した突拍子もない提案にあっけにとられる様子の愛里寿さん。無理もない状況だが、正直これ以上は手が進む気がしない。

「えつと、その全部もらうわけにはいかないですがどれも魅力的でして、できたらあなたのおすすすめを食べさせてほしいなーって。」

「えつ… ああ、なるほど：？ わ、わかりました」

明らかに困惑した様子ではあるが、俺の意味不明な熱量に押されて、躊躇しながらもゆつくりとお弁当のおかずにお箸を伸ばした。

「えつと、じゃあこれを… あ、あーん」

「あーん、ムグっ… うぐっ」

当たり前だが、自分で食べようと人から食べさせてもらおうと辛いことは変わらない。い。

先ほどのチキンライス同様、明らかに人外量の香辛料が入ったハンバーグが口の中を

えらいことにする。

「えへ： えへへ。 なんかこれまるで新婚さんみたいですね」

「あ、あの水もちよつと。」

しかし、そんな状況を尻目に、食べさせることになぜか快感を覚えた様子の愛里寿さんがまるでふれあいコーナーの動物にエサを与えるように、次々と口の中に劇物を投入する。

そうしてしばらく涙目になりながらも、必死に耐え続け、ようやく弁当の中身がなくなったと思つたさなか、なぜか愛里寿さんは小さな容器を取り出した。

「あ、あの： まさかこんなにおいしそうに食べてくれるなんて思つてなくて．．出そうと思つて悩んでただけで、じ、実はデザートも作つてきたんだ」

「で、デザートでひゆか？ 是非食べたいです！」

（助かった！ デザートならこの痛みを緩和できる！ 助かつ：）

「特製ハバネロ・キャロライナ・リーパー※・イチゴ大福です！ 私が発明した甘辛スイーツです！ 一口サイズなので一気にどうぞ！ はい、あーん！」

「え、まって？ ハバネロなんだって？ てか、甘の比率少なすぎつムグつ：！?」

間髪入れずに口に入った大福？を噛んだ瞬間、口の中に炎がほとばしる。

先ほどの戦いで限界を迎えていた俺はゆっくりと意識を失っていくのだった。

どれくらいたったんだらうか、気が付くと俺は知らない白い天井が目に入った。

「()は…病院？」

むくりと起き上がると、どうやら大きな病棟の一室のようだった。

しばらくして病院の医師が俺の様子を見に来る。

「おー、目を覚ましましたか。お体は大丈夫ですか？」

「え、ええ…。特には。すみません」迷惑かけて」

「いやいや、愛里寿様の大切な方です。普段からお世話になってますから、恩返しができ
てこちらもうれしい限りです。治療代等はすでに愛里寿様から頂いておりますので」

「そ、そうだったんですね」

「うんうん、お気になさらず。お薬とか、治療代の明細等ははこちらに置いておきますの
で、必ず目を通しておいってください。少しやけどの症状もみられますので。それと。」
「？」

「あなたは素敵な男性ですね。あの子。いや、愛里寿様をよろしく頼みます。少し人見
知りですが、あなたでしたら彼女の心の傷もきつと癒せるはずですよ」

少し意味深な言葉を残した後、医者も少し微笑んで、あとは若いお二人で、と席を外
した。

きっと男性恐怖症の愛里寿さんを気遣ったのだろう、病室のドア越しにずっと眺めていた彼女に一瞥を加えると、静かに反対のドアから去っていった。

「っ!! 河野さん! よかった!! 目を覚ましたんですね! : ごめんなさい私なんてことを。」

医者が出ていくと同時にガラツとドアを開けて愛里寿さんが駆け寄る。

ぎゅつと手を握りながらしばらく俺の横で顔をぐしゃぐしゃにして泣きじやくるのだった。

——数十分後

「落ち着きました?」

「: はい、こちらが加害者なのにごめんなさい。取り乱しちゃいまして。重ねて謝罪します」

「ははっ: 全然大丈夫ですよ。それにこちらこそごめんなさい、料理を食べている最中に気絶なんて: 最低ですよね」

「: : 我慢してたんですよ。私のことを気遣って」

「あ: : いや: : それは: :」

「いいんですよ、お医者さんから説明がありましたから。体に拒絶反応が出ていて、ショック性の症状が強いつて。あと少し量が多くなっていたら命だつて危なかつた」

て：： きつと相当無理してたんですよね」

「：： すみません」

「い、いやいや！ 怒っているとかじゃなくて！：： ただ、河野さんはすごいなって」

そういつてバックから小さなぬいぐるみを取り出した。

縫い目が入ったかわいい熊？のようだが、包帯やギプスをしていてなんとも不思議なキャラクターだった。

「この子、ボコっていうんです。私の大好きなアニメのキャラクターなんですけど」

「ボコ：： ですか、ずいぶんお怪我されてるみたいですが」

「そう！ それがボコなの！：： どんなに強い相手でも勇敢に立ち向かって戦うの！弱いからいつつボコボコにされちゃうんだけど、何度やられても立ち上がる姿が：：」

急に饒舌にしゃべり始めたが、はつとした表情で我に返った愛里寿さんはこほんと咳ばらいをすると続けて話し始めた。

「ま、まあボコの魅力はおいておいて：：。とにかく私が言いたいのはあなたが私の好きなボコみたいだなって思ったんです」

「：： お、俺がですか？」

「私だつてこの味付けが普通じゃないことくらいわかります。どんなにきつくても何度でも私の料理にそれこそ命を賭して挑み続ける。そんなところがすごく似ているなっ

て……。そんな河野さんをみて私本当に感動しちゃったんです。：だから、その」

すこし言い淀むと、先ほどのバックを少し躊躇した手つきで開いて、先ほどのボコの小さなぬいぐるみをもう一つ出すして、俺に差し出した。

同じようだが、先ほどのものとは違い、片腕にだけ指輪のようなアクセサリーがついている

「……これは？」

「これは戦車道連盟が作ったボコの限定モデルです。私が大会で優勝した際に記念して作られた世界で一つしかないものです。……河野さんこれをどうか受け取ってもらえませんか？」

「えっ、でも一つしかないんですよ？　こんな貴重なものをなんで俺に」

「……実は次の大会、優勝の副賞にこのボコと同じ限定モデルがもう一度配布されることになっていんです。でも最近はなんだかうまくいかないことばかりで……正直諦めかけてました」

そういうえば、ミカも言っていた。ここ数年名門島田流、西住流が揃って優勝旗を奪えずにいるらしい。

もちろん常に上位には食い込むが、西住みほを筆頭とした新勢力が猛威を振るい、優勝にはこぎつけない現状は常勝を平時としている彼女たちにとってはさぞつらい時期

だろう。

「でも、私決めたんです。次の大会、必ず優勝して見せます。優勝してもう一つのボコを手に入れてみせます。だから、その決意の証、受け取ってくれませんか？」

何か吹っ切れたような、そんなすがすがしい表情をした彼女は、練習場で会った時よりも、きらきらと輝いて見れた。

「……わかりました。では、これはお預かります。必ず優勝してね」

「!! はい！ 絶対見に来てくださいね！」

「Aチーム！ もっと展開早くして！」

「Cチームもフラッグを守るのが遅い！ そんなんじやすぐ撃破されちゃうよ！」

「なんか最近、隊長いい感じだね」

「そうそう！ 闘気満々だけど、冷静沈着というか！ めっちゃかつこいいよね！」

「……当初の予定とは違ったけどとりあえず作戦は成功かね、メグミ」

「そうねえ、にしてもやるわね、あの子。あの男性嫌いをここまでやる気にさせる異性が

でるとはね、お姉ちゃんちよつと感動よ、ねえルミ?」
「まっ、隊長が隊長らしくなってくれてよかったわ。：：あととは次期島田流候補を陥落させただけね」

(待っててね! 河野さん! 優勝して必ず。：。迎えに行くから!)

自信に満ちた彼女の声が、今日も練習場に響き渡る。

島田流当主の目にはもう、優勝旗しか眼中にないのであった。

第22話 ミスサンダースの頼み事

—ここサンダース大学では毎年行われている外部向けの大規模イベント開催に伴い海外から多数の著名人が参加しており……

島田さんと出会ってから数日が立ったある朝、弟とテレビを見ながら食事をしていると、大学特集として、リポーターがサンダース大学を取り上げていた。

嬉々として声を張るリポーターの後ろにはきらびやかにレッドカーペットが敷かれたパーティー会場ではセレブ達が集まるとイベントを楽しんでいる様子が映っていた。

「……相変わらずド派手だねえ、この大学は。パーティー会場だけで兄ちゃんの大学くらいありそう」

「へえ、戦車道大会でちよつと見たことあつたけど、こんな大きな大学だったんだ」

「大きいなんてもんじゃないよ！ 普通の大学の10倍はあるって話だよ。なんと構内で電車が通ってるって噂もあるくらいで」

「……随分詳しいんだな。俺はさっぱりだな、なんか興味を引くものでも？」

普段からあまり感情を表に出さない弟が割と興奮気味に話していることから察するに、

「ふふっ。当たり前じゃん。なんてったってこの大学は超エリート育成大学だもん！超大金持ち、有名人、インフルエンサーを多数輩出してる実績もあるんだよ！この大学の人と在学中にお付き合いでもできようものならそれはもう玉の輿！将来安定間違いなし！くうう！誰でもいいからお近づきになれないかなあ！」

普段からあまり感情を表に出さない弟が割と興奮気味に話していることから察するに、将来のパートナーとして優良物件この上ない人材があふれている。要は、元の世界でいうイケメン高学歴高収入男が集まっている大学といった感じのようだ。

「サンダース大学ねえ。」

頼付けをつきながら、スマホでサンダース大学について検索をしていると、テレビが金髪のある女性のインタビュに移った。美しい外見もさることながら、自信満々なその立ち振る舞いはまさにカリスマ性を絵にかいたような姿だった。

「さて、今年のミスサンダースに最も近いといわれているケイさん！先日も戦車道では素晴らしい活躍でしたね！まずはその強さの秘訣から…」

「…ミスサンダース？なんだろう、学校代表的な奴かな？」

「ほう、兄ちゃん、ミスサンダースに興味を持つとはお目が高い。流石、血は争えないって奴かな？」

「…別に目を引いただけで興味は…」

「こら！龍弥！　いつまで飯食ってんの！高校遅れるわよ！」

「うわ！　やばいもうこんな時間だ!!　行つてきますす！」

「…　結局なんなんだ、ミスサンダースって…」

テレビをリビングで見っていた母の怒号が飛び、弟は急いで家を飛び出してしまった。あまり気になつてはいなかったが、生殺しになつてしまった分、ちよつともやもやしなからもいつも通りの時間に大学に向かうのだった。

「…　なんだ？　やけに騒がしいな…」

キャンパスに入ろうと正門に向かうと、そこには大量の生徒で人だかりができていた。

中心ではスマホで写真を撮る音や歓声が聞こえるため、どうやらまたいつぞの時のように有名人が来ているようだ。

（うーん、早く教室に行きたいんだけど…　思いのほか人が多いな…）

人混みが嫌いなのとさして興味もないため、通ろうと左へ右へルートを探したがどうにも人が多く、通れない。

（あ、よかつた！　端っこは人が少なそうだ　人が増えないうちに急いで…）「うわっ!!」バキッ

人だかりを無理やり抜けようと通つた際、ほかの生徒の足に引つ掛かり、大きな鈍い

音を立て、抱えていたトートバックの中身をぶちまけながら器用にこけてしまった。

その瞬間、先ほどまで騒いでいた生徒たちの視線は一気に自分のほうに集中した。

「つてえ… 最悪… 恥ずかしくて死にそう… ううっ」

「… 何やってんだお前… ったく」

恥ずかしさと痛みで悶絶している自分の横で手慣れた手つき拾い上げる女性。

涙目になりながらも顔を上げるとよく見知った顔がそこにはあった。

「あ、すみません、ありがとうございます… って、ち、ちーちゃん!? え? なんでここに?」

「私も呼ばれたんだよ、あそこの馬鹿に… てか顔、鼻血出てるぞ ほれ」

「あ、ありがとう…」

「まったたく… 世話の焼ける…」

ぶつくさ言いながらも、イケメンムーブでハンカチを貸してくれたちーちゃんは、再びしゃがみこんで残りの俺の荷物を拾ってくれた。

「えへへ、ちーちゃんって優しいね」

「… つるさい! 急に変なこと言うな! 女として当然だ!」

「えー? なんで怒ってるの?」

「あつ! ごめんね! ごめんね! サインはまた今度でね! … ごつめーん! 千代

美! おまたせ!」

ちーちゃんとやり取りをしていると後ろから金髪の女性が近づいてきた。

遠巻きに見ていたのだからわからないが、人だかりが移動しているところを見るとおそらく中心にいた人物であろう。

「ほんとだよ！　なんだこの騒ぎは！」

「アハハっ！　ごめんごめん！　人探ししてたら思いのほか人が集まっちゃて…　ほら私最近ちよろつと有名人だからさ」

「はあ…　お前というるとほんとに疲れる…」

「ごめんごめん！　私もこんなことになるとは思わなくて！　あつ君もごめんね！　えっと…　名前は」

「か、河野です。ちーちゃ…　安齋さんとは幼馴染で…」

「河野…？　OH！　あなたが河野さんね！　ラッキー！　探す手間が省けたわ！　ここじゃんだから、ちよつと近くのカフェまで行きましょ！　どうしても頼みたいことがあつて！　千代美もほら早くー！」

「お、おい！」

急に近づいてきたかと思うと鬼のような速さで俺の手をひいた彼女は、近くのカフェまで半ば強制的に連れてかれた。

「え、えっと…　はじめまして…　河野って言います」

(と、いいつつ…… なーんか見たことある気がするんだよなあ)

「初めまして！ サンダース大学のKEYっていうわ！ よろしくね！」

ぐいっつと手を握られ、強引に上下にぶんぶんと手を動かす彼女。よく言えばフランク、悪く言えばなれなれしいが、そこまで嫌な感じがしないのは彼女の人柄だろう。

「……で、河野に何の用だ。私や西住はともかく、お前はこいつに面識ないだろう」ズズ

「あつはは！ 私も初対面だよ！ ……でもあなたについてちよろつと噂を聞いてね。もしそれが本当なら頼みたいことがあつてね！」

「頼みたいこと？」

「そうそう……あ、でもその前に念のため二人に一つ確認したいことがあつて」

「？」

「えっと、二人は付き合つてたりするのかしら？」

「ブツ！ ゴホツゴホ……きゅ、急に何を言い出すんだお前は！ そんなわけないだろ！」

「ち、ちーちゃん!? 大丈夫!?!」

確かに急な質問に驚いたが、それ以上にちーちゃんは動揺したようで、飲んでいたコーヒーを思いっきり嘔き出してせき込んでいた。

「えー！そんなの!!」 随分仲良さそうだからってつきり!」

「ま、まあ昔からの旧知の仲ではあるし? ただの友達って感じでもないよな?」

ちーちゃんは、せき込んだせいか涙目になりながらも、こぼしたコーヒーをハンカチで拭きながらちらりとこちらを一瞥した。不安そうだが少し期待したようなそんな不思議な表情をしていた。

(そ、そうか。これは助けを求めているんだ! とりあえず恋人関係ではないことを強調しないと!)

「そうなの? えつと河野さん?」

「はい! ちーちゃんとはその:。いうなら大親友みたいなものです! まったくそれ以上はありません!」

「うっ」

「ちーちゃんは昔から異性とは思えないですし!」

「ぐっ」

「で、でも仲良くはあるので、えつと親戚の姉みたいな、それ以上はないですが!」

「ぐはっ!!」

再びコーヒーを吹き出したちーちゃんはまた、テーブルに顔を突っ伏した。

ぶつぶつと何かをつぶやきながら、なぜかちよつと泣いていた。

「お、OKOK! 河野さん! もう大丈夫! よくわかったから! う、疑って悪かったわね。千代美。え、えっと、本当にごめんなさい!」

「いやいや。納得してくれてよかった。ほんとに!」

ちーちゃんはよくわからないが、とりあえず丸く収まったようだ。

「え、えっとそれで、頼み事ってなんですか?」

「そ、そうそう! 河野さんにちよつとお願ひしたいことがあつて!」

そういつて先ほどのように私の手をぎゅつと握ると、じつと俺の目を見つめ、こう続けた。

「私の恋人役になってくれないかしら?」

再び、テーブルに頭をぶつけるちーちゃんの音が静かなカフェに響くのだった。